秋田県文化財調査報告書第484集

県　立　聾　学　校　遺　跡

－旧県立聾学校解体工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１３・２

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

県立聾学校遺跡

－旧県立聾学校解体工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１３・２

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

このたび、秋田県教育委員会では旧県立聾学校校舎を解体し、新たな土地活用のため更地にすることにしました。一方、同校敷地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である県立聾学校遺跡が存在することが知られています。このため、本教育委員会では、同遺跡の内容を確認する発掘調査を実施し、埋蔵文化財の保存と活用を図ることになりました。

本報告書は、平成23年度に秋田市において実施した県立聾学校遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代から弥生時代の土坑や焼土遺構、柱穴様ピットが検出され、縄文土器、弥生土器、土製品、石器などの遺物も見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年２月

秋田県教育委員会

教　育　長　米　田　　進

例　　言

1　本書は、旧県立聾学校解体工事に伴い、平成23(2011)年度に発掘調査した秋田県秋田市土崎港北２丁目17外に所在する県立聾学校遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報30(平成23年度)』及び発掘調査報告会資料などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2　調査要項

遺　跡　名	県立聾学校遺跡(けんりつろうがっこういせき)
遺 跡 略 号	５ＫＲＲＧＫ
遺跡所在地	秋田県秋田市土崎港北２丁目17外
調 査 期 間	平成23年９月28日～平成23年11月30日
調 査 面 積	1,165㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	簗瀬　圭二　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)
	村上　義直　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　文化財主査)
総務担当者	菊地　尚久　(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　主査)
調査協力機関	秋田市教育委員会

3　平成24年度の整理作業及び本報告書作成は「緊急雇用創出臨時対策基金事業」として実施した。

4　本書第２図は、秋田市都市整備部都市計画課提供の１/2,500都市計画図を、第４図は、大日本帝國陸地測量部大正元年測圖、同14年鉄道補入二万五千分一地形図『土崎』(昭和２年発行)を、第５図は、国土地理院発行の１/50,000地形図『秋田』(平成21年発行)をもとに作成した。

5　遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を使用した。

6　発掘調査および整理作業における以下の作業は下記の業者に委託した。

水準測量および方眼杭設置作業：株式会社タカシーバルプラン

石器実測・トレース：株式会社アルカ

7　本書の執筆は、簗瀬圭二が行い、編集は簗瀬と村上義直が行った。

凡　　例

1　本報告書に掲載した平面図(遺構実測図)の方位は、世界測地系平面直角座標第Ｘ系による座標北を示す。原点(ＭＡ50)における座標北と磁北との偏角は西偏８°20′である。

2　遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付した。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。

ＳＫ：土坑　ＳＮ：焼土遺構　ＳＫＰ：柱穴様ピット

3　遺物写真の縮尺は任意である。

目　　次

序
例言・凡例
目次
挿図目次・表目次・図版目次
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　調査の方法と成果 …… 15
　第１節　調査の方法 …… 15
　第２節　基本層序 …… 15
　第３節　検出遺構と遺物 …… 19
　　１　土坑 …… 19
　　２　焼土遺構 …… 20
　　３　柱穴様ピット …… 20
　　４　出土遺物 …… 21
第４章　総括 …… 32
図版
報告書抄録 …… 39

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　遺跡周辺図 …… 5
第３図　遺跡周辺の地形分類図 …… 6
第４図　大正元年測図の遺跡周辺地形図 …… 8
第５図　県立聾学校遺跡と周辺遺跡位置図 …… 9
第６図　基本層序図 …… 17
第７図　遺構配置図 …… 18
第８図　ＳＫ01・02・04・05・07、ＳＮ06、ＳＫＰ03・08 …… 23
第９図　出土遺物（１）…… 24
第10図　出土遺物（２）…… 25
第11図　出土遺物（３）…… 26
第12図　出土遺物（４）…… 27
第13図　出土遺物（５）…… 28

表目次

第１表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（１）…… 10
第２表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（２）…… 11
第３表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（３）…… 12
第４表　出土遺物観察表（１）…… 29
第５表　出土遺物観察表（２）…… 30
第６表　出土遺物観察表（３）…… 31

図版目次

図版１　１　調査区全景（北西→）
　　２　基本層序Ｃ東側断面（南東→）
　　３　基本層序Ｄ東側断面（東→）
　　４　ＳＫ01検出状況（南西→）
　　５　ＳＫ02半截状況（南→）
図版２　１　ＳＫ07完掘状況（南西→）
　　２　ＳＮ06検出状況（南西→）
　　３　ＳＫＰ03半截状況（南西→）
　　４　ＳＫＰ08半截状況（南東→）
　　５　接合した剥片石器の出土状況（西→）
　　６　第Ⅲ・Ⅳ層遺物出土状況（西→）
　　７　作業風景（南→）
　　８　地元老人会の見学会（北西→）
図版３　出土遺物（１）
図版４　出土遺物（２）
図版５　出土遺物（３）
図版６　出土遺物（４）

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

県立聾学校は、平成22年４月に本県の療育・特別支援教育の拠点として秋田市上北手にオープンした「あきた総合支援エリアかがやきの丘」に移転した。同エリアには、県立聾学校のほか、県立秋田きらり支援学校、県立盲学校の特別支援学校３校と県立医療療育センターが設置され、医療・療育・教育の連携により、障害児及び障害者への総合支援を目指している。エリア内３校の特別支援学校は、将来的には県内小・中学校等への支援等、特別支援教育のセンターとしての役割を担うことが期待されている。(註１)

一方、移転によって使用されなくなった聾学校旧校舎については、県教育委員会により解体に伴う工事計画が策定されることになった。解体工事区内は周知の県立聾学校遺跡(註２)であり、埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、本事業を計画・実施する秋田県教育庁総務課施設整備室より、文化財保護法に基づき解体工事に先立つ対応について秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室に、調査と指導の依頼があった。文化財保護室は、確認調査で遺跡の状態を明らかにし、その結果を踏まえ対応すべきことを回答した。確認調査は、秋田県埋蔵文化財センターが平成22年９月13日～９月28日まで実施し、工事区内の発掘調査対応面積985㎡を確定した(註３)。これを受けて文化財保護室と施設整備室が協議した結果、発掘調査による記録保存の措置をとることで合意し、秋田県埋蔵文化財センターで翌年度の発掘調査計画を策定した。

以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、工事に先立って平成23年９月28日～11月30日まで県立聾学校遺跡の発掘調査を実施した。なお、調査開始後、遺跡の遺存範囲が一部東に広がることが判明し、最終的に1,165㎡を調査した。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成23年９月28日～11月30日まで実施した。なお、調査区の本調査に先立ち、９月28日～30日までバックホウ、キャリアダンプによる表土除去、９月30日～10月４日までグリッド杭打設を行った。また、本調査終了後の11月28日～30日に調査区の埋め戻しを行い、30日に文化財保護室磯村学芸主事立ち会いのもと、施設整備室村上主査、埋蔵文化財センター榮中央調査班班長、簗瀬学芸主事、村上文化財主査で現地引き渡し協議を行った。各週ごとの調査経過については、以下のとおりである。

【第１週】10月３日～10月７日

コンテナハウスヤード周辺では、発掘機材の機材庫搬入・整頓、看板設置、三相発電機の防音壁設置などの環境整備を行った。発掘調査(粗掘り)は、黒砂層(第Ⅲ層)とその下層(第Ⅳ層)の縄文・弥生

時代の旧表土が比較的よく残る調査区北側の高位面から開始し、確認調査時のトレンチを清掃した。中央部には東西方向に土層観察用のベルトを設置し、旧表土が中央部のなだらかに低くなる低地にも広がるか確認中である。中央部付近は水が湧くため、中央部西端に釜場を設置して調査区の地下水位を下げて掘り下げる。排土置き場造成中に遺物の出土範囲が調査区外東側に広がることが判明したため、７日(金)に文化財保護室磯村学芸主事、榮中央調査班班長と現地協議を行い、調査範囲を拡張し発掘調査期間内に調査することにした。

【第２週】10月11日～ 10月14日

調査区北側と中央部東側の精査を行い、確認調査で検出済みの土坑ＳＫ01を完掘した。ＳＫ01の覆土からは微細な縄文土器片が３点出土したが、性格は不明である。精査と並行して、全体の粗掘りと確認調査時の南北トレンチの清掃も行う。遺物はにぶい黄褐色砂層(第Ⅱｂ層)、黒砂層(第Ⅲ層)、黒褐～暗褐色砂層(第Ⅳ層)、にぶい黄褐色砂層(第Ⅴ層)から出土する。第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の標高は調査区内でも高低差があるが、連続する高まりは北西－南東方向に延び、ほぼ海岸線に平行である。遺物は第Ⅳ層から比較的多く出土する。ポンプで汲み上げた排水の一部は遺跡内で浸透せず、排水路から校地外に流出するため、調査終了時に周辺の道路の清掃を行う。見学者１名。

【第３週】10月17日～ 10月21日

調査区北側第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層精査。ＭＡ～ＭＧ49区以北は終了。調査区中央部東側第Ⅲ・Ⅳ層精査。基本層序用中央部東西ベルト清掃のため、ベルト南西端に釜場設置。その後、断面写真撮影、実測。確認調査時の南北トレンチの清掃と断面写真撮影、実測。調査区中央部中央、北側の粗掘り。調査区中央部東側を重機により表土除去、調査区範囲を東側に一部拡張した。文化財保護室磯村学芸主事から敷地外の側溝に流出する排水について、沈殿槽にシートを取り付けるなどして、よりきれいな排水にするよう指導を受け、実施した。見学者１名。

【第４週】10月24日～ 10月28日

調査区中央部中央～西側の粗掘り。調査区南側の第Ⅲ層精査開始。調査区中央部東側第Ⅳ層精査中。中央部東側ベルト(ＬＲ46区付近)断面写真撮影、実測。基本層序用中央部東西ベルト掘り下げ、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層の土壌サンプルを採取。調査区範囲を先週に引き続き東側に一部拡張した。縄文～弥生時代の生活面は、さらに東側に延びるようだが、三相発電機等があり、現状ではこれ以上は拡張できない。これまでに拡張した範囲を含めて、周辺を先行して精査し、遺構や遺物の検出状況を踏まえ、来週以降に拡張の有無を判断することにした。見学者１名。

【第５週】10月31日～ 11月４日

調査区中央部西側の粗掘り、一部第Ⅲ層精査中。調査区南側の第Ⅲ・Ⅳ層精査中。調査区中央部東側第Ⅳ層精査終了(遺構なし)。調査区南端で径約65cmの土坑ＳＫ02と柱穴様ピットＳＫＰ03をそれぞれ１基検出した。ＳＫ02の覆土からは微細な縄文土器片が１点出土したが、性格は不明である。ＳＫ02・ＳＫＰ03精査終了。ＬＴ49区東側境界壁面断面でＳＫ04を検出した。同精査終了。調査区中央東側の第Ⅳ層で石器が比較的集中して出土した。このうち、スクレイパー（１点)、二次加工ある剥片(３点)、剥片(４点)は接合する。集中地点付近で作業小屋等の施設の有無を精査したが、確認できなかった。見学者４名。

【第６週】11月７日～ 11月11日

調査区中央部西側第Ⅲ層精査中。調査区中央部中央第Ⅳ層精査中。調査区南側の拡張部第Ⅲ層精査中。調査区南側の第Ⅳ層精査中にＳＫ05・07、ＳＮ06、ＳＫＰ08を検出。縄文～弥生時代の生活面の第Ⅳ層が削平下にも残存する部分があるため、榮中央調査班班長と現地で協議し、調査区南端周辺を東側にさらに拡張し、最終的な調査範囲を確定した。調査区の総拡張面積は180㎡である。９日（水）に若松老人会35名見学。見学者36名。

【第７週】11月14日～ 11月18日

調査区中央部西側第Ⅲ・Ⅳ層精査中。調査区中央部中央第Ⅳ層精査終了。調査区南側の拡張部第Ⅳ層精査終了。調査区南側の第Ⅳ層精査終了。ＳＫ05・07、ＳＮ06、ＳＫＰ08精査終了。調査区全景写真をローリングタワーから撮影。調査区南端から磨製石斧が、南端東側の拡張部からＸ字形土偶が出土した。見学者３名。

【第８週】11月21日～ 11月25日

中央部の第Ⅳ層精査及び図面等の最終チェックを行う。湧水により調査できなかった調査区北西端と南西端の第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の堆積状況をバックホウによる深掘りで確認した。発掘調査精査終了。見学者１名。

第３節　整理作業の経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図の整合性をはかった図を第二原図として作成し、これをトレースして挿図を作成した。第二原図の作成は平成23年12月～平成24年３月にかけて行い、トレースは平成24年12月まで行った。

遺物の整理は、平成23年12月～平成25年２月にかけて秋田県埋蔵文化財センター中央調査班で行った。洗浄・注記・接合・復元作業の間、報告書に記載する遺物の選別・分類を行い、実測図・拓影図を作成した後に写真撮影を行った。遺物の注記は、遺跡略記号（５ＫＲＲＧＫ）・出土位置・遺物番号・出土層位・出土年月日を記入した。

註１　秋田県教育委員会　『教育あきた』11・12月号№700　2010（平成22）年

註２　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（秋田・河辺地区版）』　2004（平成16）年

註３　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第475集　2012（平成24）年

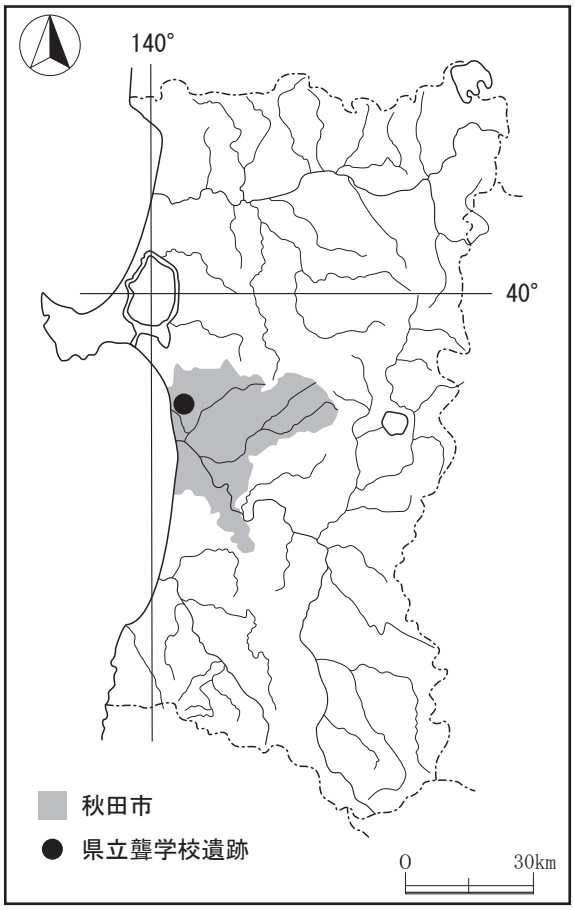
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡が所在する秋田市は、秋田県の海岸平野部のほぼ中央に位置し、太平山系を中心とする出羽山地に東方を区分される。県立聾学校遺跡はＪＲ奥羽本線土崎駅より北東へ約0.8㎞、日本海から約2.9㎞東にあり、陸上自衛隊秋田駐屯地の西隣、北緯39度45分44秒、東経140度４分53秒に位置する。

遺跡周辺の地質は下位から新第三紀中新世中期後半の女川層、中新世後期の船川層、鮮新世天徳寺層、笹岡層、第四紀更新世の高岡層、潟西層、現世の沖積層、砂丘堆積物で構成されている。遺跡は砂丘堆積物上に立地する。(註１)

遺跡周辺の地形を西から概観すると、日本海に接するように標高約10～20ｍの海岸砂丘が発達し、その東に標高約10ｍ以下の沖積低地、そして標高約50～200ｍの丘陵地、標高約200ｍ以上の山地に分けられる。遺跡は、日本海沿岸を覆う秋田砂丘に位置する。秋田砂丘は、雄物川河口を中心に、北は男鹿市脇本付近から南は由利本荘市松ヶ崎付近までの約45㎞にわたって形成される。最大幅は、潟上市天王字下出戸付近で約４㎞、平均幅は約2.5㎞で、新屋浜以南は幅が急に狭くなり、１㎞以下となる。雄物川河口より北部で最も標高が高いのは、金足地区南西部にある追分山の45.9ｍで、北へ向かうに従って低くなり、脇本付近で10ｍ以下になる。また、雄物川河口より南部では、基盤が海岸近くに出ていることから砂丘層は薄くなっている。(註２)秋田砂丘は、三列に大別され、内陸側から第一列砂丘、第二列砂丘、第三列砂丘と呼ばており、第一・二列砂丘の形成期は、縄文時代後期以前に遡り、第三列砂丘はそれ以降に形成されたと考えられている。(註３)遺跡が所在する土崎砂丘地は、南北を雄物川と新城川に囲まれた土崎を中心とした砂丘地で、第一列砂丘の上に第二列砂丘が覆っている。(註４)遺跡は、砂丘地の東端付近に位置し、東側には沖積低地が広がる(第３図)。このような日本海に平行に伸びる砂丘列の東端付近に立地する遺跡には、本遺跡の北北西約3.1㎞に平右衛門田尻遺跡が、(註５)同じく約6.5㎞には小泉潟周辺の潟向Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、耳取Ⅰ遺跡がある。(註６)これらの遺跡からは、縄文時代の深鉢形土器や弥生時代の壺形土器、土器に付属していたと考えられる人面などの本遺跡と並行する時期の遺物が発掘または採集されている。

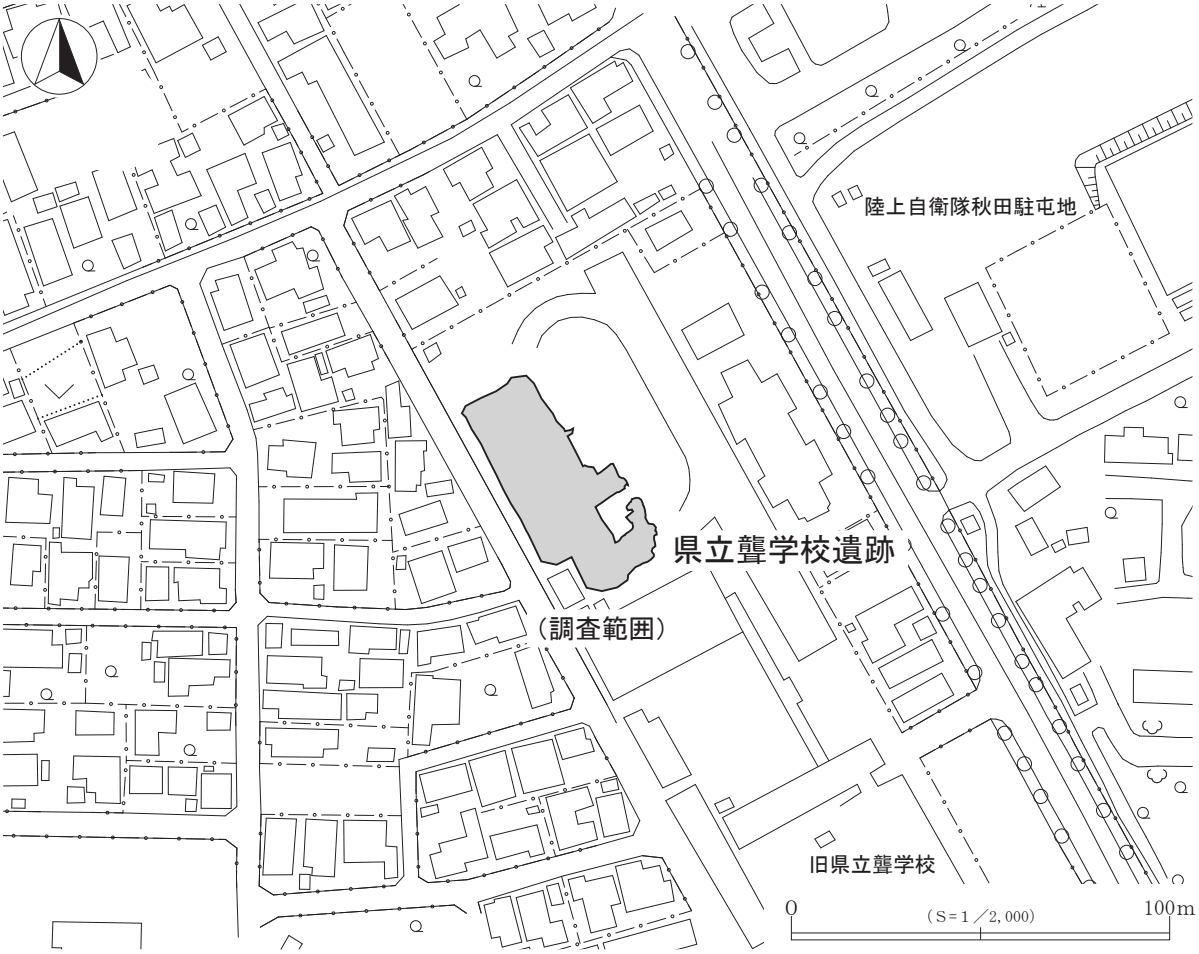


第１図　遺跡位置図

発掘調査対象範囲の現況は、宅地に隣接する標高10ｍ前後のほぼ平らな学校用地でグラウンドとし

て利用されていたが、グラウンド造成時の盛土下には旧聾学校校舎の建築基礎部分が残存していた。大正元年測図昭和２年発行の２万５千分の１地形図(註７)(第４図)では、遺跡の東側標高が11.6mと周辺より高く、もともとは起伏のある砂丘地の松林であった。昭和20年代初頭には牧草地として利用され、その後の聾学校建設(昭和26年)と校庭の地均し(昭和29年)時に大規模な土地造成を行い、現在のような学校用地になったと考えられる。発掘調査の結果、縄文時代から弥生時代にかけての旧表土層と考えられる第Ⅲ・Ⅳ層の標高は北東側が高く、南西側に緩やかに傾斜することが明らかになった(第６図)。調査区北東端側と南西端側の第Ⅳ層上面の標高は、それぞれ約9.5～9.7mと約8.0～8.6mで、最大で1.7mの比高がある。調査区北東端では第Ⅲ・Ⅳ層が消滅することから、大正時代の地形図から推測すると、調査区は砂丘地のなかの小丘の南西斜面にあり、調査区の北東側にあった小丘の高位面は削平されたものと考えられる。

註１　通商産業省工業技術院地質調査所　『秋田地域の地質』　1977(昭和52)年
註２　秋田市　『秋田市史　第一巻　先史・古代　通史編』　2004(平成16)年
註３　草薙祥子　「秋田砂丘の砂丘地形と遺跡について」『秋田考古学』第32号　1975(昭和50)年
註４　秋田県　『昭和58年(1983)日本海中部地震の記録　災害要因と実例』　1985(昭和60)年
註５　秋田県教育委員会　『平右衛門田尻遺跡－広域基幹河川改修事業(鉄道橋・道路橋緊急対策事業)新城川に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第455集　2010(平成22)年
註６　秋田市　『秋田市史　第六巻　考古　史料編』　2002(平成14)年
註７　大日本帝國陸地測量部　大正元年測圖、同十四年鉄道補入二万五千分一地形図　土崎　1927(昭和２)年



第２図　遺跡周辺図

山　地

仁別山地（Ⅰa）

丘陵地

上新城丘稜（Ⅱa）・羽黒山丘稜（Ⅱb）・和田丘陵（Ⅱc）・高清水丘稜（Ⅱd）

台　地

手形山台地（Ⅲa）・千秋公園台地（Ⅲb）・御所野台地（Ⅲc）

低地および砂丘地

馬踏川低地（Ⅳa）・新城川低地（Ⅳb）・旭川低地（Ⅳc）・太平川低地（Ⅳd）・秋田低地（Ⅳe）

天王砂丘地（Ⅳf）・土崎砂丘地（Ⅳg）・勝平山砂丘地（Ⅳh）

海岸低地（Ⅳi）

● 県立聾学校遺跡

※引用文献　経済企画庁 『土地分類基本調査　秋田』 1966（昭和41）年

第３図　遺跡周辺の地形分類図

第２節　歴史的環境

『秋田県遺跡地図(秋田・河辺地区版)[註1]』及び秋田市遺跡詳細分布調査報告書追補版[註2]に基づいて作成した県立聾学校遺跡を中心とする秋田市北西部の遺跡分布図(第５図)には、143の遺跡を数えることができる。標高100m以下の丘陵上と標高20～30mの海岸段丘上に形成された砂丘地上に大部分の遺跡が立地しており、沖積低地に立地する少数の遺跡は微高地を選んで営まれている。ここでは、本遺跡とほぼ同時期の縄文時代から弥生時代に展開した遺跡で、発掘調査が実施された遺跡を中心に概観する。以下の記述は県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧(第１～３表)にある文献を参考にした。

縄文時代前期の遺跡には、片野Ⅰ遺跡(112)、秋田城跡(128)、児桜貝塚(131)がある。このうち、上新城丘陵の標高約50mの南斜面に立地する片野Ⅰ遺跡では、竪穴建物跡１棟を検出した。雄物川に面した高清水丘陵地の東北側、標高30mに立地する児桜貝塚は1965(昭和40)年秋田市教育委員会が発掘調査し、ヤマトシジミを主とした最大層厚55cmの貝層から大木2b式土器片や石器(石鏃・石槍・石匙・石錘など)、刻線礫が出土した。

縄文時代中期の遺跡には、嶋下り(88)、源内沢Ⅰ(97)・Ⅱ(98)、片野Ⅰ、松木台Ⅱ(102)遺跡、秋田城跡などがある。このうち、片野Ⅰ遺跡では竪穴建物跡１棟、フラスコ状土坑30基、陥し穴を検出した。

縄文時代後期の遺跡には、北野Ⅰ(２)、片田(12)、耳取Ⅰ(28)、梵天長根(35)、追分駅東(40)・平右衛門田尻(91)、片野Ⅰ遺跡、秋田城跡などがある。北野Ⅰ遺跡では露頭から完形の十腰内Ⅰ式の鉢形土器が３点発見された。梵天長根遺跡では十腰内Ⅰ式土器とともに、17基の土坑、土器埋設遺構が検出された。秋田城跡が立地する高清水丘陵では、広く土器片や土製品、石器の散布が認められる。

縄文時代晩期の遺跡には北野Ⅲ(３)、上新城中学校(103)、杉崎12号(105)・13号(106)・15号(107)遺跡、秋田城跡、片野Ⅰ、後城(127)遺跡などがある。このうち、上新城中学校遺跡は上新城丘陵の標高35～45mの河岸段丘上にあり、大洞C_1式期を最盛期として晩期のほぼ全期にわたる遺跡である。竪穴建物跡、土坑墓143基のほか、集落を囲む木柵跡が検出されている。遺物は土器(深鉢形土器・鉢形土器・台付鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・注口付土器など)、土製品(土偶・三角形土製品・円盤状土製品・蓋状土製品など)、石器(石鏃・石匙・石錘・箆状石器・掻器・削器・石鍬状石器・磨製石斧・凹石・磨石・鋸歯縁石器など)、石製品(岩版・石冠・独鈷石・石棒・石剣など)などが出土した。片野Ⅰ遺跡では捨て場から、土器(深鉢形土器・鉢形土器・台付鉢形土器・浅鉢形土器・皿形土器・壺形土器・注口付土器・香炉形土器など)、土製品(ミニチュア土器・亀形土製品・勾玉状土製品など)、石器(石鏃・尖頭器・石匙・石錘・嘴状石器・箆状石器・掻器・鍬状石器・磨製石斧・凹石・磨石・石皿など)、石製品(石棒)などが多量に出土した。杉崎12号・13号・15号遺跡からは高圧送電線の鉄柱建設の際に、ほぼ完形の注口付土器や鉢形土器片、磨製石斧、炭化したクルミなどが出土した。

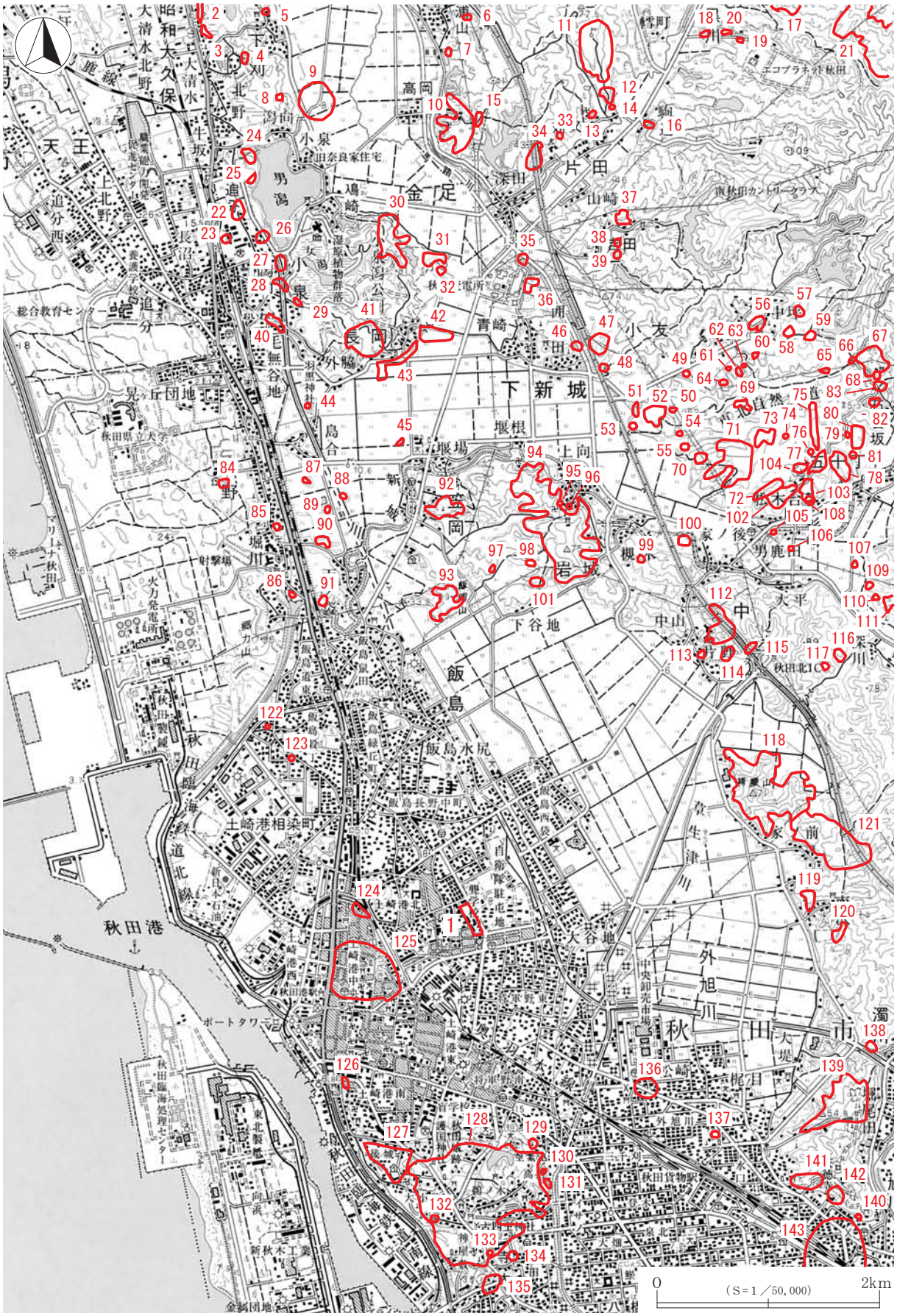
この他に縄文時代の時期不詳の遺跡として、浅田(16)、金足農高北(22)、金足農高(23)、潟向Ⅱ(26)、耳取Ⅱ(29)、竹子山Ⅰ(31)、待入Ⅲ(34)、青崎(36)、熊野田(42)、蚕沢(46)、山崎(48)、羽田台Ⅰ(50)、長面Ⅲ(62)、谷地Ⅱ(71)、小林Ⅰ(77)・Ⅲ(78)、堂ノ前Ⅱ(81)・Ⅲ(82)・Ⅳ(83)、岩城大沢(101)、松木台Ⅲ(104)、山ノ下Ⅰ(111)、片野Ⅱ(113)、鼻コシリ(114)、五百刈沢(115)、五六沢(116)、貝布沢(117)、尼館(118)、南沢(119)、三ノ堰(120)、寺小山(124)、大堤(138)遺跡、大

堤館(139)がある。待入Ⅲ遺跡は、上新城丘陵の西側、標高約15mの段丘面に立地し、発掘調査では中世の掘立柱建物跡などが検出され、中世が主体の遺跡であるが、縄文時代の石器(石鏃・石槍・石匙・石箆・磨製石斧・石棒・三角濤形石製品など)が出土した。

弥生時代の遺跡には、潟向Ⅰ(24)・Ⅲ(27)・Ⅳ(25)、耳取Ⅰ、梵天長根、平右衛門田尻、上新城中学校、松木台Ⅲ、片野Ⅰ、後城遺跡、秋田城跡などがある。このうち、潟向Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ、耳取Ⅰ遺跡は小泉潟周辺の砂丘地に立地する。潟向Ⅰ遺跡では、潟の岸に近い、黒砂層から田舎館式土器に比定される弥生時代中期の完形の壺形土器が、耳取Ⅰ遺跡では細長く残った砂丘の一角に縄文時代から弥生時代の遺物包含層が残り、弥生時代前期と推定される土器片と土器に付属していたと考えられる人面を表現した遺物が採集された。本遺跡の北東約3.3kmにある片野Ⅰ遺跡では、弥生時代前期から後期にわたる土器片が出土している。

註１　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』（秋田・河辺地区版）　2004(平成16)年
註２　秋田市教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』　2002(平成14)年

第４図　大正元年測図の遺跡周辺地形図



第５図　県立聾学校遺跡と周辺遺跡位置図

第１表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（１）

※表中の遺跡地図番号は、『秋田県遺跡地図（秋田・河辺地区版）』に記載された登録番号である。

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献
1	201－１－351	県立聾学校	A	土坑、焼土遺構、柱穴様ピット、縄文土器片、弥生土器片、X字形土偶、石器	1・2・3・4・5・本書
2	201－１－19	北野Ⅰ	D・B	縄文土器（後期）、土師器、須恵器	3・4・6・7・8・9・10
3	201－１－20	北野Ⅲ	B	縄文土器、瓦	3・4・6・10
4	201－１－21	雨池	B	須恵器、鉄滓、窯壁	3・10
5	201－１－368	下刈	F・B	経石	3
6	201－１－23	カニ沢	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
7	201－１－24	金ヶ崎	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
8	201－１－25	高田	B	珠洲系陶器片	3
9	201－１－235	細入	B	須恵器片、土師器片、赤褐色土器片	3・10
10	201－１－26	高岡館	E・G	主郭、帯郭、空堀、板碑、五輪塔、竪穴状遺構	3・6・11・12
11	201－１－27	片田館	E		3・6・11
12	201－１－28	片田	B	縄文土器片、石器	3・4・6
13	201－１－29	待入Ⅰ	B	須恵器片	3
14	201－１－246	待入碑	B	板碑２、五輪塔	3
15	201－１－30	二本松	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
16	201－１－31	浅田	B	縄文土器片、石器	3・4
17	201－１－33	こださ館	E		3・6・11
18	201－１－34	馬込Ⅰ	B	須恵器片、赤褐色土器片	3・6・10・13
19	201－１－35	馬込Ⅱ	B	溝跡１条、土坑１基、柱穴群、土師器片、赤褐色土器片	3・6・10・13
20	201－１－366	黒川山	B	須恵器片、土師器片、赤褐色土器片、磁器片、鞴羽口、砥石	3・6・13
21	201－１－36	しんしゅう館	E		3・6・11
22	201－１－37	金足農高北	B	縄文土器片	3・4・6
23	201－１－38	金足農高	B	縄文土器片（後期）	3・4・6
24	201－１－39	潟向Ⅰ	D・B	弥生土器片、蔵骨器（赤褐色土、土師器）、須恵器片	3・4・6・8・9・10
25	201－１－40	潟向Ⅳ	B	弥生土器片	3・4・6・14
26	201－１－41	潟向Ⅱ	B	縄文土器片（晩期）	3・4・8
27	201－１－42	潟向Ⅲ	B	弥生土器片	3・4・6・8・14
28	201－１－43	耳取Ⅰ	B	縄文土器片、弥生土器片	3・4・6・15
29	201－１－44	耳取Ⅱ	B	縄文土器片	3
30	201－１－45	箱館	E		3・4・15
31	201－１－46	竹子山Ⅰ	B	石器（石匙）、須恵器片、土師器片	3・4
32	201－１－47	竹子山Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
33	201－１－48	待入Ⅱ	B	赤褐色土器片	3
34	201－１－49	待入Ⅲ	B	掘立柱建物跡、火葬墓、井戸跡、土坑、溝跡、須恵器、土師器、赤褐色土器、珠洲系陶器、石器	3・4・6・10・17・18
35	201－１－50	梵天長根	B	土坑17基、土器埋設遺構１基、縄文土器（後期）、弥生土器、石器	3・4・6・19
36	201－１－51	青崎	B	縄文土器片	3・4
37	201－１－52	羽中	B	須恵器片	3
38	201－１－53	松ノ下Ⅰ	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
39	201－１－54	松ノ下Ⅱ	B	須恵器片	3
40	201－１－59	追分駅東	B	縄文土器片、須恵器、赤褐色土器片、石鏃	2・3・4・6
41	201－１－60	長岡館	E	主郭、腰郭、帯郭	3・11
42	201－１－61	熊野田	B	石鏃、赤褐色土器片、土師器片	3・4・20
43	201－１－62	長岡	B・A	掘立柱建物８棟、柱列１列、井戸跡１基、土坑12基、溝跡８条、柱穴、河川跡、須恵器、土師器、赤褐色土器、瓦、灰釉陶器、白磁、近世陶磁器、石器、刀子、銭貨	3・15・21
44	201－１－126	羽黒神社宝篋印塔	H	宝篋印塔（塔身、笠）	3・18・22・23
45	201－１－372	佐戸反	B	土坑、柱穴、土師器片、須恵器片、赤褐色土器片	3・24
46	201－１－63	蚕沢	B	縄文土器片、須恵器片、土師器片	3・4
47	201－１－64	箱館	E	郭、帯郭、段築	3
48	201－１－365	山崎	B・A	掘立柱建物跡、竪穴遺構、土坑、柱穴、溝跡、須恵器片、土師器片等	3・4・10・16・25
49	201－１－65	長面Ⅰ	B	須恵器片、赤褐色土器片	3・10
50	201－１－66	羽田台Ⅰ	B	縄文土器片	3・4
51	201－１－67	塩田沢	B	須恵器片、赤褐色土器片	3
52	201－１－68	末沢	B	須恵器片、赤褐色土器片	3・10

第２表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（２）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献
53	201－１－69	羽田台Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３・10
54	201－１－70	末沢Ⅰ	B	土師器片、赤褐色土器片	３
55	201－１－71	末沢Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３
56	201－１－72	家ノ前館	E	空堀	３
57	201－１－73	猿田沢Ⅰ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３・10
58	201－１－74	猿田沢Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３
59	201－１－75	家ノ前Ⅰ	B	須恵器片	３・10
60	201－１－76	家ノ前Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３
61	201－１－77	長面Ⅱ	B	瓦質火鉢	３
62	201－１－78	長面Ⅲ	B	縄文土器片	３・４
63	201－１－79	長面Ⅳ	B	珠洲系陶器片	３
64	201－１－80	長面Ⅴ	B	須恵器片	３
65	201－１－81	羽鳥沼Ⅰ	B	須恵器片	３
66	201－１－82	羽鳥沼Ⅱ	B	石器、石器破片	３・４
67	201－１－83	石名坂館	B	腰郭、竪掘、空堀	３・６
68	201－１－84	龍泉寺	C	庭園（庭石等）	３
69	201－１－85 (201－１－⑮)	末沢窯跡群 （上代窯跡）	Ⅰ	窯跡２基、須恵器片、円面硯、　※県指定史跡	３・６・10
70	201－１－86	谷地Ⅰ	B	須恵器片	３
71	201－１－87	谷地Ⅱ	Ⅰ・A	窯跡２基、竪穴建物跡、縄文土器片、須恵器片、赤褐色土器片、瓦、石器	３・４・６・10・8
72	201－１－367	上新城大沢	B	須恵器片、土師器片	３・６
73	201－１－88	大沢窯跡Ⅰ	Ⅰ	赤褐色土器片、須恵器片、瓦、窯壁	３・６・10
74	201－１－89	大沢窯跡Ⅱ	Ⅰ	竪穴建物跡、須恵器片、窯壁、窯跡１基	３・６・10
75	201－１－90	小林窯跡	Ⅰ	窯跡２基、須恵器片、窯壁	３・６・10
76	201－１－91	小林Ⅱ	D	土師器壺	３・６・７・８・9
77	201－１－92	小林Ⅰ	B	縄文土器片、須恵器片、赤褐色土器片	３・４・６
78	201－１－93	小林Ⅲ	B	縄文土器片、赤褐色土器片	３・４・６
79	201－１－94	堂ノ前Ⅰ	B	須恵器片	３・６
80	201－１－95	堂ノ前館	E	土塁・空堀	３・６
81	201－１－96	堂ノ前Ⅱ	B・E	縄文土器片	３・４
82	201－１－97	堂ノ前Ⅲ	B	縄文土器片・須恵器片、赤褐色土器片	３・４・６
83	201－１－98	堂ノ前Ⅳ	B	縄文土器片・須恵器片	３・４・６
84	201－１－104	街道端西	B	赤褐色土器片	３
85	201－１－105	堀川Ⅰ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３
86	201－１－106	堀川Ⅱ	B	須恵器片、赤褐色土器片	３
87	201－１－107	乳倉	B	須恵器片、土師器片	３
88	201－１－108	嶋下り	B	縄文土器片（大木10式）、須恵器片、土師器片	２・３
89	201－１－109	雀島	B	土師器片	３
90	201－１－110	芋田	B	赤褐色土器片	３
91	201－１－376	平右衛門田尻	B	鍛冶工房跡１基、井戸跡８基、土坑60基、溝跡６条、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲系陶器	26・27
92	201－１－111	笠岡館	E	郭、腰郭、帯郭、空堀	３・６・11
93	201－１－112	飯岡館	E		３・６・11・28・29
94	201－１－113	岩城館	E	主郭、郭、腰郭、帯郭、空堀、土塁、竪堀、珠洲系陶器壺、開元通宝	３・６・11・30
95	201－１－359	福城寺宝篋印塔	H	宝篋印塔（塔身）	３・18・23・25
96	201－１－243	福城寺脇弁財天碑	G		３
97	201－１－114	源内沢Ⅰ	B	縄文土器片	３・４・６
98	201－１－115	源内沢Ⅱ	B	縄文土器片	３・４・６
99	201－１－116	右馬之丞窯跡	Ⅰ	須恵器片、窯壁	３・６・10
100	201－１－349	堂ノ前	B	赤褐色土器片	３
101	201－１－117	岩城大沢	B	縄文土器片	３・４
102	201－１－118	松木台Ⅱ	B	縄文土器片、須恵器片、土師器片、赤褐色土器片	３・４・６・10・31
103	201－１－119	上新城中学校	B	土坑墓群（縄文晩期）、縄文土器（後期、晩期）、弥生式土器片、石鏃、石錐、石匙、玉類、勾玉、土偶	３・４・６・32・33・34・35・36
104	201－１－120	松木台Ⅲ	B	縄文土器片、弥生式土器片	３・４・６・33
105	201－１－121	杉崎12号	B	縄文土器（注口土器）、石斧	３・４・６・32
106	201－１－122	杉崎13号	B	縄文土器片、石斧	３・４・６・32
107	201－１－123	杉崎15号	B		３・４・６・32

第３表　県立聾学校遺跡周辺の遺跡一覧（３）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献
108	201－１－125	日吉神社	B	珠洲系陶器壺　※市指定文化財	３・37
109	201－１－236	桑ノ木Ⅰ	B		３・４
110	201－１－237	桑ノ木Ⅱ	B		３・10
111	201－１－238	山ノ下Ⅰ	B		３・４
112	201－１－133	片野Ⅰ	B	竪穴建物跡４棟（縄文・平安時代各２）、陥し穴46基、土坑50基、縄文土器片、須恵器片、赤褐色土器片	３・４・６・10・38・39
113	201－１－134	片野Ⅱ	B	縄文土器片、須恵器片、赤褐色土器片	３・４・10
114	201－１－135	鼻コシリ	B	須恵器片	３・４・10
115	201－１－136	五百刈沢	B	須恵器片、赤褐色土器片	３・４・10・40
116	201－１－137	五六沢	B	須恵器片、赤褐色土器片	３・４
117	201－１－138	貝布沢	B	縄文土器片	３・４
118	201－１－139	尼館	E・B	主郭、腰郭、空堀、縄文土器片、須恵器片、赤褐色土器片	３・４・11
119	201－１－150	南沢	B	縄文土器片、須恵器片	３・４
120	201－１－151	三ノ堰	B	縄文土器片、赤褐色土器片	３・４
121	201－１－152	笹岡館	E	郭、空堀、竪堀	３・11
122	201－１－148	穀丁	B	青磁、仏花瓶、擂鉢、茶臼　※県指定有形文化財：青磁碗他	３・６・23・36・41
123	201－１－357	雲祥院宝篋印塔	H	宝篋印塔（反花、基礎、笠）	３・18・23・25
124	201－１－149	寺小山	B	石錘	３・４
125	201－１－165	湊城跡	J		３・６・11・29・31・42～50
126		土崎湊御蔵跡	K		20・47
127	201－１－185	後城	A	掘立柱建物跡２棟、竪穴建物跡32棟、井戸跡、土坑墓等、土師器、須恵器、珠洲系陶器、古瀬戸、美濃、青磁、白磁、宝篋印塔等	３・４・５・６・10・18・36・43・47・51
128	201－１－186	秋田城	L・E	築地、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、柱列、井戸跡、鍛冶炉跡等、縄文土器、石器、石製品、土師器、須恵器、赤褐色土器、木製品、鉄製品、木簡、漆紙等　※国指定史跡	52・※
129	201－１－352	高野	B	須恵器片	３
130		高野Ⅱ	B	縄文土器片、石器（石錘・剥片等）	26・47
131	201－１－187	児桜貝塚	M	縄文土器片、土錘、石器（石槍、石錘、石鏃、石匙等）	３・４・６・33・53
132	201－１－232	菅江真澄墓	N		３
133	201－１－233	根笹山	N		３
134	201－１－234	寺内焼窯跡	I	陶器窯跡１基、瓦窯跡４基、煉瓦窯跡１基、灰原、近世陶磁器、瓦、煉瓦、木製品	３・54
135	201－１－214	神屋敷	N		３・10
136	201－１－191	八柳館	E		３・11
137	201－１－188	八幡田	B	須恵器片、赤褐色土器片、青磁片	３
138	201－１－166	大堤	B	縄文土器片	３・４
139	201－１－167	大堤館	B・E	郭、腰郭、空堀、土塁、縄文土器片	３・４・11
140	201－１－190	御嶽根	B	縄文土器片、赤褐色土器片	３・11
141	201－１－189	山崎館	E	郭、腰郭	３・11
142	201－１－229	万固山天徳寺	P	※県指定史跡、重要文化財：建造物	３・33・36
143	201－１－228	一ノ坪条里制遺構	Q		３・10・45・55

※種別欄はＡ（集落跡）、Ｂ（遺物包含層）、Ｃ（寺院跡）、Ｄ（火葬墓）、Ｅ（館跡）、Ｆ（経塚）、Ｇ（板碑）、Ｈ（宝篋印塔）、Ｉ（窯跡）、Ｊ（城郭）、Ｋ（蔵跡）、Ｌ（城柵）、Ｍ（貝塚）、Ｎ（墓地）、Ｏ（古墳擬定地）、Ｐ（社寺）、Ｑ（条里制遺構）である。

※秋田城跡は1972（昭和47）年から毎年継続調査が実施され、多数の報告書等が刊行されているため、上記の文献以外の掲載は省略した。

第１～３表文献(表中の番号は文献番号に対応する。)

1　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第342集　2002(平成14)年

2　秋田市教育委員会　『市内遺跡確認調査報告書』　2004(平成16)年

3　秋田市教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』　2002(平成14)年

4　秋田市　『秋田市史　第六巻　考古　史料編』　2002(平成14)年

5　秋田市　『秋田市史　第一巻　先史・古代　通史編』　2004(平成16)年

6　奥山潤　「秋田市周辺の縄文晩期末及後続期の遺跡概要」『秋田考古学』第22号　1963(昭和38)年

7　秋田県　『秋田県史考古編』　1960(昭和35)年

8　奈良修介・豊島昴　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書３　1967(昭和42)年　吉川弘文館

9　庄内昭雄　「秋田県における古代中世の火葬墓」『秋田県立博物館研究報告』第９号　1984(昭和59)年

10　秋田市　『秋田市史　第七巻　古代　史料編』　2001(平成13)年

11　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

12　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

13　株式会社黒川産業・秋田市教育委員会　『馬込Ⅰ遺跡・馬込Ⅱ遺跡・黒川山遺跡発掘調査報告書』　1994(平成６)年

14　根岸洋　「もう一つの志藤沢式土器－奥山潤氏の型式設定資料をめぐって－」『秋田考古学』第51号　2007(平成19)年

15　秋田市教育委員会　『市内遺跡確認調査報告書』　2001(平成13)年

16　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第217集　1991(平成３)年

17　秋田県教育委員会　『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－待入Ⅲ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第224集　1992(平成４)年

18　秋田市　『秋田市史　第八巻　中世史料編』　1996(平成８)年

19　東北電力株式会社秋田支店・秋田市教育委員会　『秋田市梵天長根遺跡－秋田変電所増設に伴う緊急発掘調査報告書』　1991(平成３)年

20　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第308集　2000(平成12)年

21　秋田市教育委員会　『長岡遺跡－下新城西部地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』　2002(平成14)年

22　磯村朝次郎　「秋田県における中世の宝篋印塔の形式と分布－特に八郎潟周辺の場合を中心として」『秋田県立博物館研究報告』第11号　1986(昭和61)年

23　秋田市　『秋田市史　第二巻　中世　通史編』　1999(平成11)年

24　秋田市教育委員会　『市内遺跡確認調査報告書』　2002(平成14)年

25　秋田県教育委員会　『山崎遺跡』　秋田県文化財調査報告書第223集　1992(平成４)年

26　秋田市教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書－追補版－』　2010(平成22)年

27　秋田県教育委員会　『平右衛門田尻遺跡－広域基幹河川改修事業(鉄道橋・道路橋緊急対策事業)新城川に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第455集　2010(平成22)年

28　戸部正直　『奥羽永慶軍記』

29　安藤和風　『秋田の土と人』　秋田郷土会　1931(昭和６)年

30　児玉幸多・坪井清足　『日本城郭大系』第２巻　青森・岩手・秋田　新人物往来社　1980(昭和55)年

31　船木義勝・泉広宣　「秋田市松木台Ⅱ遺跡の須恵器」『秋田県立博物館研究報告』第18号　1993(平成５)年

32　秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡とその周辺遺跡』　1973(昭和48)年

33　秋田魁新報社　『秋田大百科事典』　秋田魁新報社　1981(昭和56)年

34　秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡』　1992(平成４)年
35　秋田市産業部・秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡』　1983(昭和58)年
36　秋田県教育委員会　『秋田の史跡・考古』　2004(平成16)年
37　秋田市教育委員会　『秋田市の文化財』　2001(平成13)年
38　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第226集　1992(平成４)年
39　秋田県教育委員会　『片野Ⅰ遺跡－秋田環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第265集　1996(平成８)年
40　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第239集　1993(平成５)年
41　庄内昭男　「秋田市飯島穀町出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』第７号 1982(昭和57)年
42　秋田市教育委員会　『市内遺跡確認調査報告書』　2005(平成17)年
43　秋田市教育委員会　『平成17年度　秋田市遺跡確認調査報告書』　2006(平成18)年
44　秋田市教育委員会　『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業(土崎駅前線)に伴う発掘調査報告書(平成17年度調査区)－』　2007(平成19)年
45　秋田市教育委員会　『平成18年度　秋田市遺跡確認調査報告書』　2007(平成19)年
46　秋田市教育委員会　『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業(土崎駅前線)に伴う発掘調査報告書(平成18年度調査区)－』　2008(平成20)年
47　秋田市教育委員会　『平成19年度　秋田市遺跡確認調査報告書』　2008(平成20)年
48　秋田市教育委員会　『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業(土崎駅前線)に伴う発掘調査報告書(平成19年度調査区)－』　2009(平成21)年
49　秋田市教育委員会　『平成20年度　秋田市遺跡確認調査報告書』　2009(平成21)年
50　秋田市教育委員会　『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業(土崎駅前線)に伴う発掘調査報告書(平成20年度調査区)－』　2010(平成22)年
51　秋田地所有限会社・秋田市教育委員会　『後城遺跡発掘調査報告書』　1981(昭和56)年
52　秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所　『秋田城跡－政庁跡－』　2002(平成４)年
53　秋田市教育委員会　『児桜貝塚』　1965(昭和40)年
54　秋田市教育委員会　『寺内焼窯跡－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査報告書－』　1991(平成３)年
55　虎尾俊哉　「秋田市北郊の条里制遺構－条里制施行の北限設定の試み－」『日本上古史研究』４巻３号　日本上古史研究会　1960(昭和35)年

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査は確認調査結果に基づき第Ⅰ層(現表土)除去を重機によって行った。第Ⅱ～第Ⅲ層上面までの粗掘り、遺構精査は移植ベラ・ジョレン等を使用して人力で作業を行った。排土運搬は一輪車を使用し、排土置き場は調査区外の東側の隣接地を利用した。

調査はグリッド法で行った。対象範囲全域に方眼杭を打設するため、調査区内に任意の１点(世界測地系平面直角座標第Ｘ系Ｘ＝-26,137.000　Ｙ＝-64,420.000)を選定して、これをグリッドの原点ＭＡ50の基準杭とした。基準杭の座標北方向に南北基線、これに直交するラインを東西基線とし、両基線を延長して当該区内に４×４ｍメッシュのグリッドを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう、それぞれ付した。なお、南北線に付した２文字のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しとなっている。この方眼によって画する４ｍ四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と東西線の符号とを組み合わせて、ＭＡ50区のように呼ぶこととした。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的な位置の把握に努めた。

遺構は、検出順に01からの通し番号を付して遺構種別を表す記号と組み合わせて呼称した。また、最終的に遺構でないと判断したものについては欠番とした。遺構の掘削は、原則として半截または十字に土層観察用ベルトを残し、２分割法、４分割法による精査を行った。調査の記録は、平面図・土層断面図及び写真で記録化した。平面図・土層断面図は原則として１/20の縮尺で作成し、遺構細部の図面を必要とする際には１/10の縮尺で作成した。遺物の取り上げについては、基本的に出土位置を計測して記録し、遺構内遺物には出土遺構名・遺構内層位・遺物番号・出土年月日を、遺構外遺物には出土区・層位・遺物番号・出土年月日を、それぞれチャック付きポリ袋もしくは耐水性荷札に記入し、取り上げた。発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出状況・半截状況・完掘状況の順で撮影し、適宜遺物の出土状況、遺構細部の拡大撮影などを加えた。また、広範囲の撮影、俯瞰状況での撮影にはローリングタワーを使用した。写真撮影は、基本的に35㎜判のモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラでの撮影も行った。

第２節　基本層序

県立聾学校遺跡は日本海沿岸に南北方向に延びる砂丘地の東端付近に立地する。遺跡の調査対象範囲の現況は宅地に隣接する標高10m前後のほぼ平らな学校用地で、今回発掘調査の対象範囲は北東－南西方向に約24m、北西－南東方向に約61mである。調査対象範囲はグラウンドとして利用されていたが、グラウンド造成時の盛土下には古い校舎の基礎が残されており、調査対象範囲内にも撹乱を受けているところがある。遺跡の層序は旧地形を考慮して地形の傾斜に平行及び直交させるようにベル

トを設定し、各地点の土層観察結果を相互に比較しながら検討を行い、遺跡の基本層序を以下の第Ⅰ～第Ⅴ層に分け、さらに混入物等で細分した(第６図)。

第Ⅰａ層　褐色(7.5YR4/4)砂質土　粘性中　しまり強

第Ⅰｂ層　砕石層

第Ⅰｃ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層　粘性無し　しまり強

第Ⅰｄ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層　粘性無し　しまり強

第Ⅱａ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層　粘性無し　しまり中

第Ⅱｂ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層　粘性無し　しまり中

第Ⅲ層　　黒色(10YR2/1)砂質シルト層　粘性弱　しまり強

第Ⅳ層　　黒褐色(7.5YR3/2) ～暗褐色(7.5YR3/3)砂層　粘性無し　しまり強　遺物包含層

第Ⅴａ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂層　粘性無し　しまり中

第Ⅴｂ層　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂層　粘性無し　しまり中

第Ⅰ層　校舎の建設やグラウンドの造成による現表土(撹乱層)である。ａ・ｂ層はグラウンド造成時の盛土である。ｃ・ｄ層はともに校舎の建設による撹乱層である。ｃ層は褐色(7.5YR4/4)砂15％、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂10％混入。所々に建築基礎コンクリート瓦礫、礫が混入する。ｄ層はにぶい黄褐色(10YR5/4)砂10％混入。所々に建築基礎コンクリート瓦礫、礫が混入する。

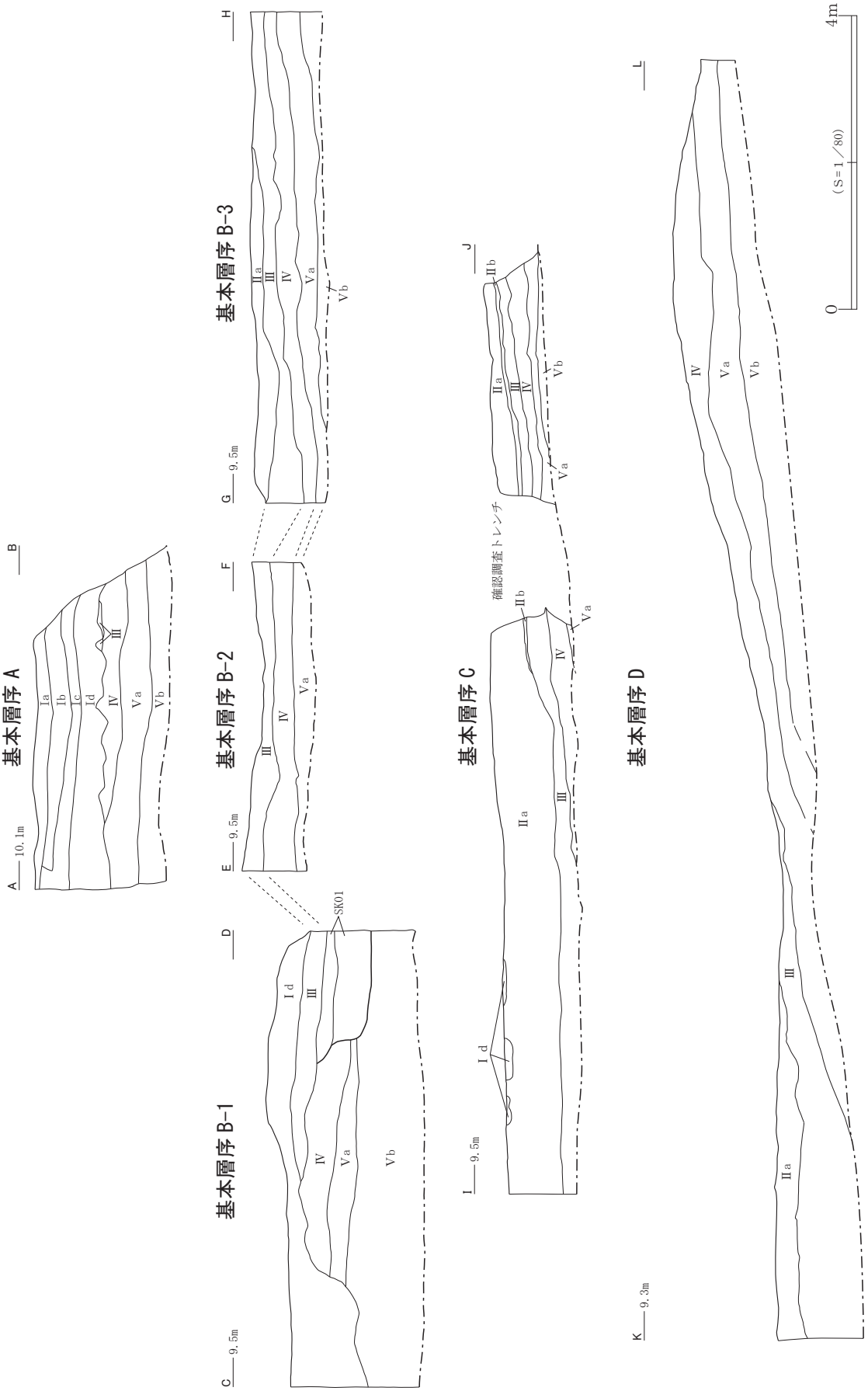
第Ⅱ層　第Ⅲ層形成後の飛砂層である。ａ層は第Ⅲ層の黒色(10YR2/1)砂塊(φ10～50mm)が斑状に５％、ｂ層は第Ⅲ層の黒色(10YR2/1)砂塊(φ10～50mm)が斑状に20％混入する。調査区の中央から西～南西側に分布する(第６図参照)。

第Ⅲ層　第Ⅳ層の黒褐色(7.5YR3/2)～暗褐色(7.5YR3/3)砂塊(φ20～30mm)が斑状に10％、炭化物粒(φ0.1～５mm)が３％混入する。土性は砂にシルトが混入し、第Ⅳ層より粘性が僅かにある。縄文～弥生土器を僅かに含有する。出土遺物から第Ⅳ層との時期差は明確ではないが、当該期は腐植を多く含み、第Ⅳ層堆積時期より相対的に安定した地表面が形成されたものと判断される。

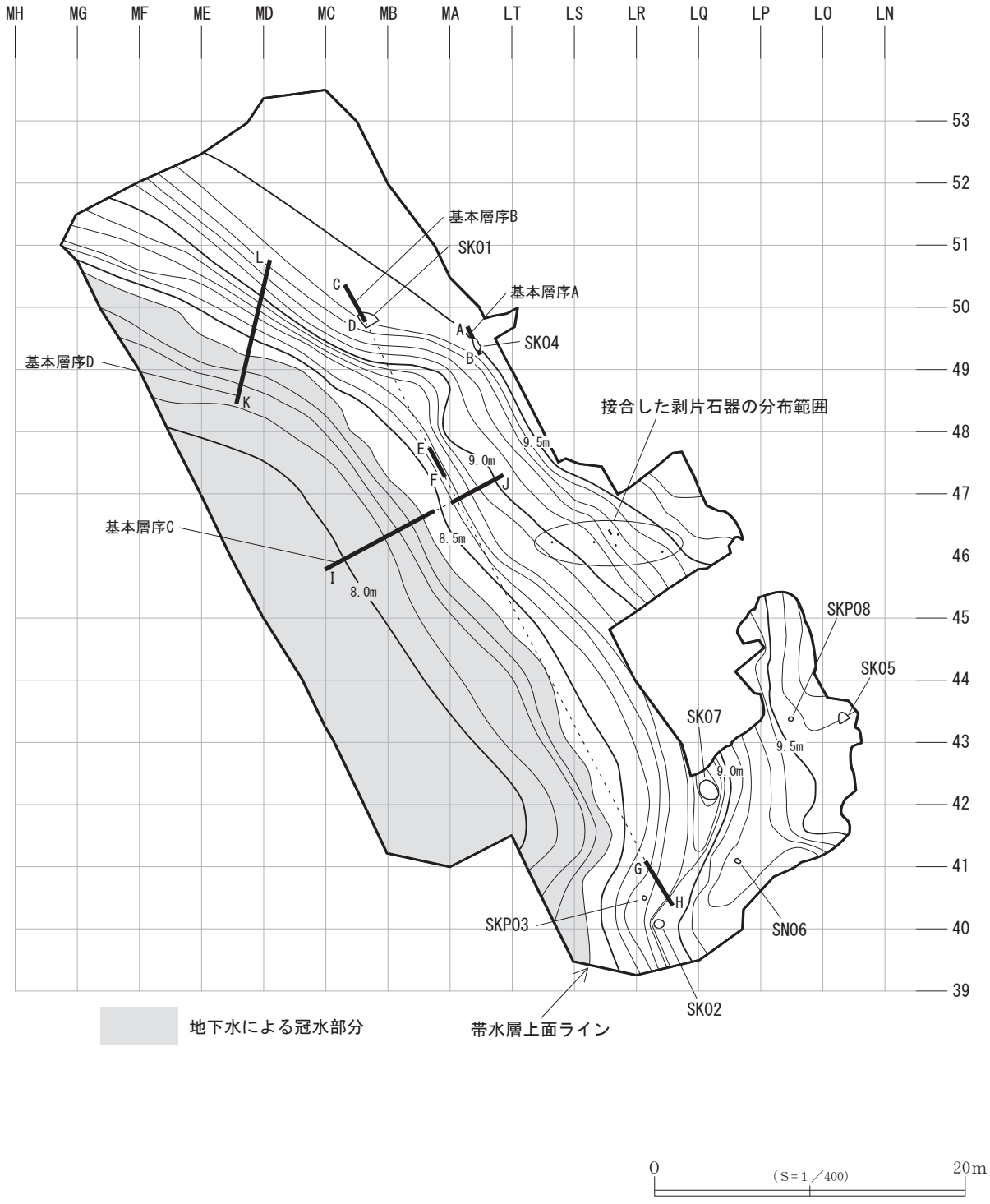
第Ⅳ層　縄文～弥生時代の旧表土(生活面)で遺物包含層、上面が遺構確認面である。第Ⅴ層のにぶい黄褐色(10YR5/4)砂塊(φ10～40㎜)が斑状に30％、炭化物粒(φ0.1～５㎜)が１％混入する。

第Ⅴ層　基盤層で、ａ層上面が遺構確認面である。ａ層はにぶい黄褐色(10YR6/4)砂塊(φ10～40㎜)が斑状に10～20％、炭化物粒(φ0.1～５㎜)が１％混入する。ｂ層はにぶい黄褐色(10YR6/4)砂塊(φ10～40㎜)が斑状に２～７％、炭化物粒(φ0.1～５㎜)が１％未満混入する。

調査区の地形は第Ⅲ・第Ⅳ層の堆積状況から北東側が高く、南西側に緩やかに傾斜する。調査区北東端側と南西端側の第Ⅳ層上面の標高はそれぞれ約9.5～9.7ｍと約8.0～8.6ｍである。第Ⅲ・第Ⅳ層は調査区北東端では消滅し、調査区南西端では更に緩やかに傾斜し、調査区外に延びていることが土層観察から予想される。調査区は現在、8.4ｍ前後で帯水層上面となる。調査区は大正時代測図の地形図(第４図)から推測すると、砂丘地のなかの小丘の南西斜面の一部で、調査区の東側にあった小丘


基本層序 A
A
B
10.1m
Ia
Ib
Ic
Id
IV
Va
Vb
III
基本層序 B-1
C
D
9.5m
SK01
I d
III
IV
Va
Vb
基本層序 B-2
E
F
9.5m
III
IV
Va
基本層序 B-3
G
H
9.5m
II a
III
IV
Va
Vb
基本層序 C
I
J
9.5m
確認調査トレンチ
I d
II a
III
IV
II b
Va
基本層序 D
K
L
9.3m
II a
III
IV
Va
Vb
0
(S=1／80)
4m

第６図　基本層序図


MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
基本層序B
SK01
基本層序A
SK04
基本層序D
接合した剥片石器の分布範囲
基本層序C
SKP08
SK05
SK07
SKP03
SN06
SK02
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
9.5m
9.0m
8.5m
8.0m
地下水による冠水部分
帯水層上面ライン
0
20m
（S＝1／400）

第７図　遺構配置図

の高位部は削平されたものと考える。また、地形図には調査区の南西側約300mに標高14.1mのなだらかな斜面が広がる小丘があり、調査区から続く南西側は微高地間の低地であった可能性が考えられる。

第３節　検出遺構と遺物

今回の調査では土坑５基、焼土遺構１基、柱穴様ピット２基の遺構を標高8.8～9.5m前後の第Ⅳまたは第Ⅴａ層上面の緩やかな斜面上で検出した。遺構は第Ⅲ・第Ⅳ層の出土遺物や検出層位から縄文時代前期～弥生時代中期に属すると推定されるが、詳細な時期は不明である。

１　土坑

土坑は５基検出した。確認調査時のトレンチ断面で確認された２基と古い校舎の建築基礎で撹乱を受けた１基の平面形状は不明だが、残りの２基は長径１m以上の相対的に大形のものと0.6mほどの小形のものがある。何れも深さは0.2～0.4m前後で比較的浅い。

ＳＫ01（第８図、図版１）

ＭＢ49区にあり、確認調査時のトレンチ断面で確認した。遺構の掘り込み面は第Ⅲ層下面、第Ⅳ層上面である。重複する遺構はない。南西と南東側が確認調査トレンチによる削平のため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値0.90m、短径残存値0.70mで、確認面から底面までの深さは0.36mである。底面はほぼ平坦で、壁は底面付近でやや丸みを帯び、開口部に向けほぼ垂直に、開口部付近でやや緩やかに開きながら立ち上がる。堆積土は１層が旧表土（第Ⅳ層）由来の黒褐色砂を主体とする自然流入土、２層が旧表土に含まれる斑状のブロック構造が崩れ、均一に混入することから人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物は微細な縄文土器破片３点（2.8ｇ）が出土した。

ＳＫ02（第８図、図版１）

ＬＱ40区にあり、第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径0.65m、短径0.56mの楕円形で、確認面から底面までの深さは0.16mである。底面は鍋底状で、壁は北東側が緩やかに、北側が開きながら、それぞれ立ち上がる。堆積土は１層が第Ⅲ層由来の黒褐色砂質シルト、２層が炭化物をやや多く含む旧表土（第Ⅳ層）由来の暗褐色砂を主体とする自然流入土と考えられる。

遺物は微細な縄文土器破片１点（2.8ｇ）が出土した。

ＳＫ04（第８図）

ＬＴ49区にあり、調査区東側境界壁面断面で確認した。遺構の掘り込み面は第Ｉｄ層下面、第Ⅳ層上面である。第Ⅲ層と第Ⅳ層の一部は削平された可能性がある。重複する遺構はない。北東側以外はトレンチによる削平のため消失し全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値0.86m、短径残存値0.30mで、確認面から底面までの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上

がる。堆積土は１層が旧表土(第Ⅳ層)由来の黒褐色砂、２層が基盤層(第Ⅴ層)由来のにぶい黄褐色砂を主体とする。一括の人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物は縄文土器破片２点(18.5ｇ)、石器剥片１点(3.1ｇ)が出土した。

ＳＫ05(第８図)

ＬＰ43区にあり、トレンチ断面の第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はない。南東側がトレンチによる削平のため全体形状は不明であるが、平面形規模は長径残存値0.70m、短径残存値0.62mで、確認面から底面までの深さは0.20mである。底面は鍋底状であり、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は単層で旧表土(第Ⅳ層)由来の暗褐色砂を主体し、炭化物粒と礫を少量含む。人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物はない。

ＳＫ07(第８図、図版２)

ＬＰ・ＬＱ42区にあり、第Ⅴａ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径1.40m、短径1.06mの楕円形で、確認面から底面までの深さ0.18mである。底面は北西側が深く、壁は北西側が急に、他は緩やかに立ち上がる。堆積土は１層が旧表土(第Ⅳ層)由来の暗褐色砂を主体に、炭化物粒を多量に含み、２層が基盤層(第Ⅴ層)由来のにぶい黄褐色砂を主体とし、旧表土(第Ⅳ層)を多量に、炭化物粒を少量含む。人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物は微細な縄文土器破片２点(8.4ｇ)が出土した。

２　焼土遺構

焼土遺構は１基検出した。明確な硬化面は認められなかったが、検出面の上面では炭化物粒を多く確認した。性格の詳細は不明である。

ＳＮ06(第８図、図版２)

ＬＰ40区に位置し、第Ⅳ層上面で炭化物粒が集中する範囲を確認し、さらにその直下から暗赤褐色砂の広がりを確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径0.38m、短径0.28mの楕円形で、確認面から最大厚0.10mで暗赤褐色に被熱赤変する。断面観察の結果、掘り込みは認められなかった。

出土遺物はない。

３　柱穴様ピット

柱穴様ピットは第Ⅴａ層上面(第Ⅲ層・第Ⅳ層が削平を受け、消滅)で２基を検出した。底面が固く締まるが柱根や抜き取り痕などは確認できず、用途・性格は不明である。掘立柱建物跡や柵列跡などの配置は確認できなかった。

ＳＫＰ03(第８図、図版２)

ＬＱ40区にあり、第Ⅴ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径0.30m、短径

0.27mの略円形で、確認面から底面までの深さ0.08mである。堆積土は単層で、旧表土(第Ⅳ層)由来の黒褐色砂を主体にし、第Ⅲ層由来砂質シルトを大量に含む。人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物はない。

ＳＫＰ08(第８図、図版２)

Ｌ○43区にあり、第Ｖ層上面で確認した。重複する遺構はない。平面形規模は長径0.34m、短径0.28mの略円形で、確認面から底面までの深さ0.25mである。堆積土は単層で、旧表土(第Ⅳ層)由来の暗褐色砂を主体に、炭化物粒を少量含む。人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物はない。

４　出土遺物

出土遺物は遺構内からの出土例は極めて少なく、大部分が遺構外の第Ⅳ層からの出土である。全体では、縄文時代前期～晩期・弥生時代の土器(19,706.2ｇ)、土製品１点、剥片石器97点(450.2ｇ)、磨製石斧１点、凹石２点、搬入礫96点(4,904.8ｇ)がある。個々の掲載遺物の特徴等については、第４～６表出土遺物観察表(１～３)に記載した。以下では掲載遺物のうちの特徴的な例を中心に略述する。

土器

縄文時代～弥生時代の土器は微細な破片が多く、時期比定できた土器破片は一部である。内訳は縄文時代前期１点(103.9ｇ)、中期(中期末葉～後期初頭も含む)166点(1,720.6ｇ)、後期390点(4,442.8ｇ)、晩期(一部弥生時代初頭も含む可能性あり)43点(266.7ｇ)、弥生前期～中期507点(2,757.0g)である。このうち、報告書には比較的大形破片で、文様が明瞭なものを中心に掲載した。その内訳は縄文時代前期後葉１点、中期22点、後期34点、晩期５点、弥生時代前期～中期26点である。それぞれの出土地点の分布状況の特徴を捉えると、次のような傾向がある。縄文時代中期は比較的偏りがなく、調査区全域から出土する。縄文時代後期は調査区北東と南東部に集中し、量的には他の時期より多い。縄文時代晩期は中央部の斜面上に集中し、後述する接合した８点の剥片石器や石鏃などが集中した範囲と共通する出土状況であるが、出土量は少ない。弥生時代の土器は中央部のほか、現在の地下水面である標高8.5m前後の等高線上に帯状に出土する。また、層位的な出土量を比較すると、第Ⅲ層が少なく、第Ⅳ層が大部分を占める。縄文時代前期後葉～弥生時代中期まで混在した状況で出土し、層位間の明確な時期差は認められない。

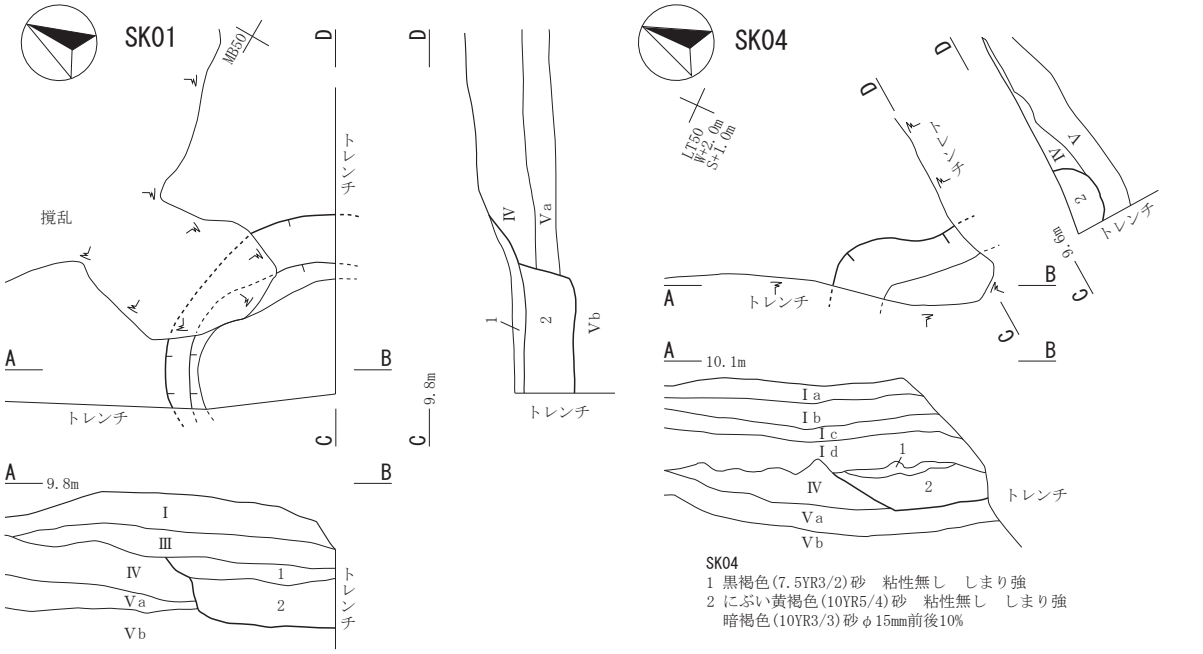
土製品

縄文時代晩期に帰属する小形の中実土偶、所謂Ｘ字形土偶１点(第12図88)が出土した。頭部、左手部を欠損し、表面の摩滅も著しい。この時期の秋田市での土偶の出土例は、桂沢遺跡(註１)１点、上新城中学校遺跡(註２)35点、戸平川遺跡(註３)43点、新屋浜貝塚(註４)１点、地方遺跡(註５)164点、湯ノ沢Ｃ遺跡(註６)１点が知られている。このうち、類似の土偶が出土した遺跡は戸平川遺跡、地方遺跡である。

石器

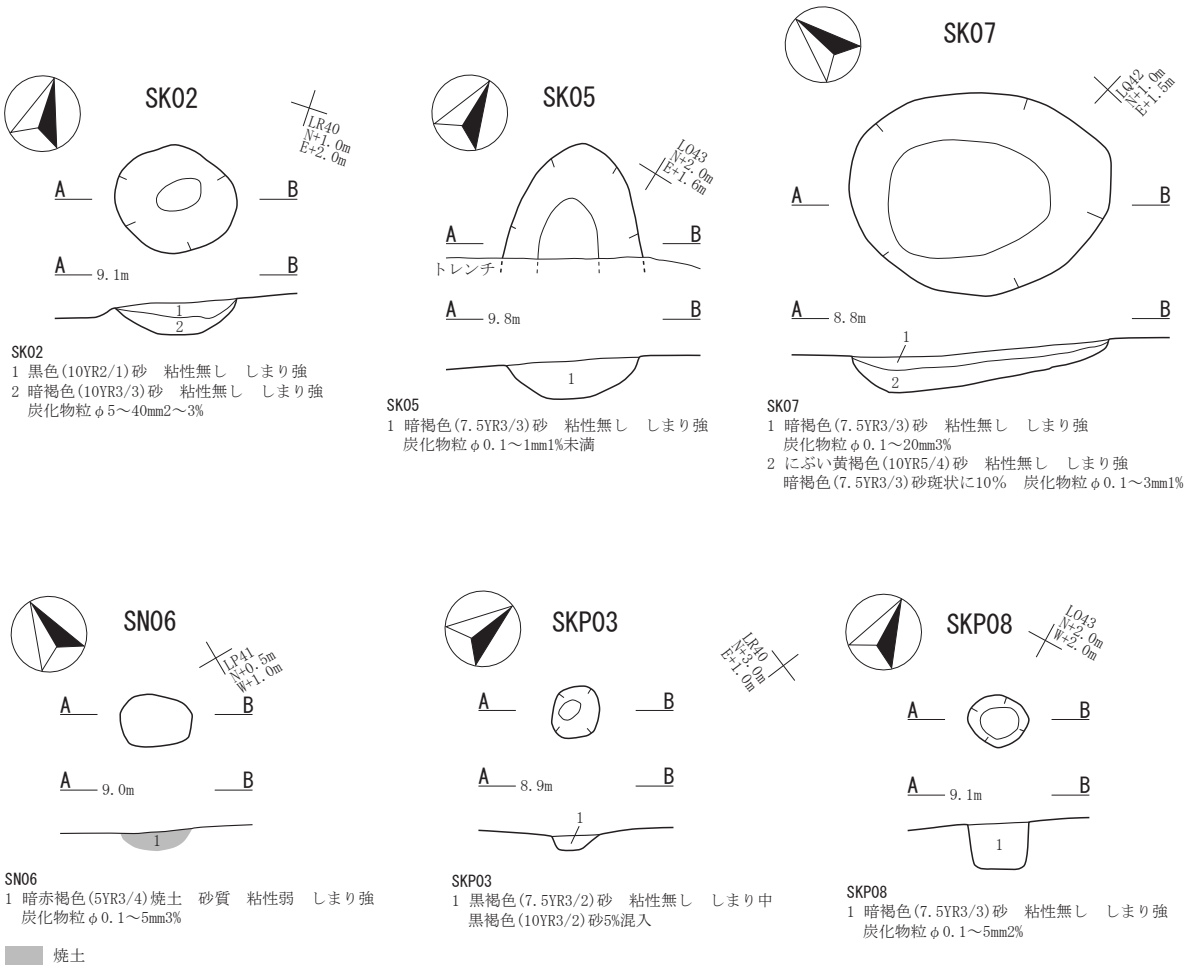
製品及び剥片を含む広義の剥片石器の内訳は、石鏃15点(第12図89～103)、石匙１点(第12図104)、スクレイパー４点(第13図112)、二次加工ある剥片11点(第12図105～107、第13図109・111・116)、剥片66点(第13図110・113・114・115)である。このほかに磨製石斧１点、凹石２点が出土している。石器類の層位的な出土量を比較すると、土器と同様に、第Ⅲ層が少なく、第Ⅳ層が大部分を占める。これらの石器は、いずれも出土層位から時期を特定することはできないが、出土土器と同時期の縄文時代前期後葉～弥生時代中期に属するであろう。このうち、石鏃は、製品の中で出土比率が高く、その形態内訳は、凸基有茎鏃６点、平基有茎鏃３点、平基無茎鏃１点、凹基無茎鏃４点、尖基鏃１点である。磨製石器は、刃幅3.1cmの小形の定角式磨製石斧が１点出土した(第13図117)。基端部が欠損し、刃部の一部が刃こぼれしている。礫石器は凹石が２点出土している。他にも円礫が多数出土し、砂丘地上に立地する遺跡であることから、遺跡内での利用を意図した搬入礫であると考える。また、スクレイパー１点、二次加工ある剥片３点、剥片４点の計８点が接合した(第13図108)。接合資料は、珪質頁岩の亜角礫を素材とし、自然面を打面として打点をジグザグに移動しながら、挿図番号①→②→③…→⑧の順番で同一作業面から連続して縦長剥片や若干寸詰まりの縦長～横長剥片を剥離している。残核は出土していない。接合資料も含めて、出土地点は、ＬＱ～ＬＴ45・46区(全調査面積の11.0％)に集中し、52点(54.2％)を占める。内訳は、石鏃７点、スクレイパー２点、二次加工ある剥片４点、剥片が39点である。当該区からは、接合はしなかったが、同一母岩から剥離されたと考えられる黒曜石製の二次加工ある剥片３点、微細な剥片２点が出土している。同様に、３種類の異なる母岩から剥離したと考えられる剥片群が出土している。さらに、当該区からは剥片のうち、刃部調整で生じた可能性がある１ｇ未満の微細な剥片が11点出土し、石器製作が行われていた可能性が考えられる。

註１　秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡とその周辺遺跡』　1973(昭和48)年
註２　註１文献
　　秋田市産業部・秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡』　1983(昭和58)年
　　秋田市教育委員会　『上新城中学校遺跡』　1992(平成４)年
註３　秋田県教育委員会　『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ－』　秋田県文化財調査報告書第294集　2000(平成12)年
註４　庄内昭男・石川恵美子　「秋田市新屋浜貝塚採集資料－鑓野目久米蔵コレクションより－」『秋田県立博物館研究報告』第15号　1990(平成８)年
註５　秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地方遺跡－』　1987(昭和62)年
註６　秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書－湯ノ沢Ｃ遺跡－』　1984(昭和59)年



SK01
1 黒褐色(7.5YR3/2)砂　粘性無し　しまり中
　褐色(10YR4/4)砂φ15～30mm斑状に20～30%
2 黒褐色(7.5YR3/2)砂　粘性無し　しまり中

SK04
1 黒褐色(7.5YR3/2)砂　粘性無し　しまり強
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂　粘性無し　しまり強
　暗褐色(10YR3/3)砂φ15mm前後10%



SK02
1 黒色(10YR2/1)砂　粘性無し　しまり強
2 暗褐色(10YR3/3)砂　粘性無し　しまり強
　炭化物粒φ5～40mm2～3%

SK05
1 暗褐色(7.5YR3/3)砂　粘性無し　しまり強
　炭化物粒φ0.1～1mm1%未満

SK07
1 暗褐色(7.5YR3/3)砂　粘性無し　しまり強
　炭化物粒φ0.1～20mm3%
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂　粘性無し　しまり強
　暗褐色(7.5YR3/3)砂斑状に10%　炭化物粒φ0.1～3mm1%

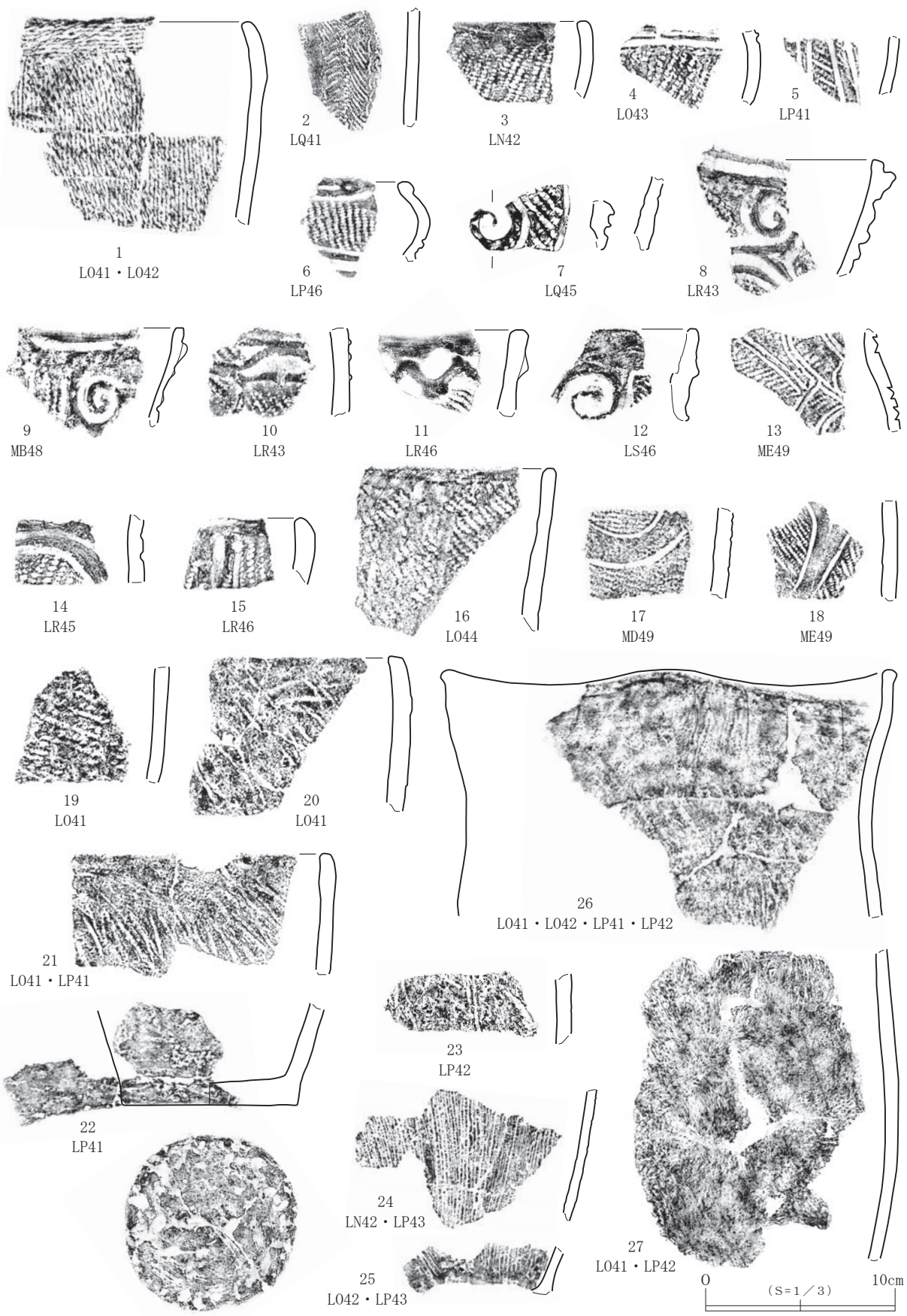
SN06
1 暗赤褐色(5YR3/4)焼土　砂質　粘性弱　しまり強
　炭化物粒φ0.1～5mm3%

SKP03
1 黒褐色(7.5YR3/2)砂　粘性無し　しまり中
　黒褐色(10YR3/2)砂5%混入

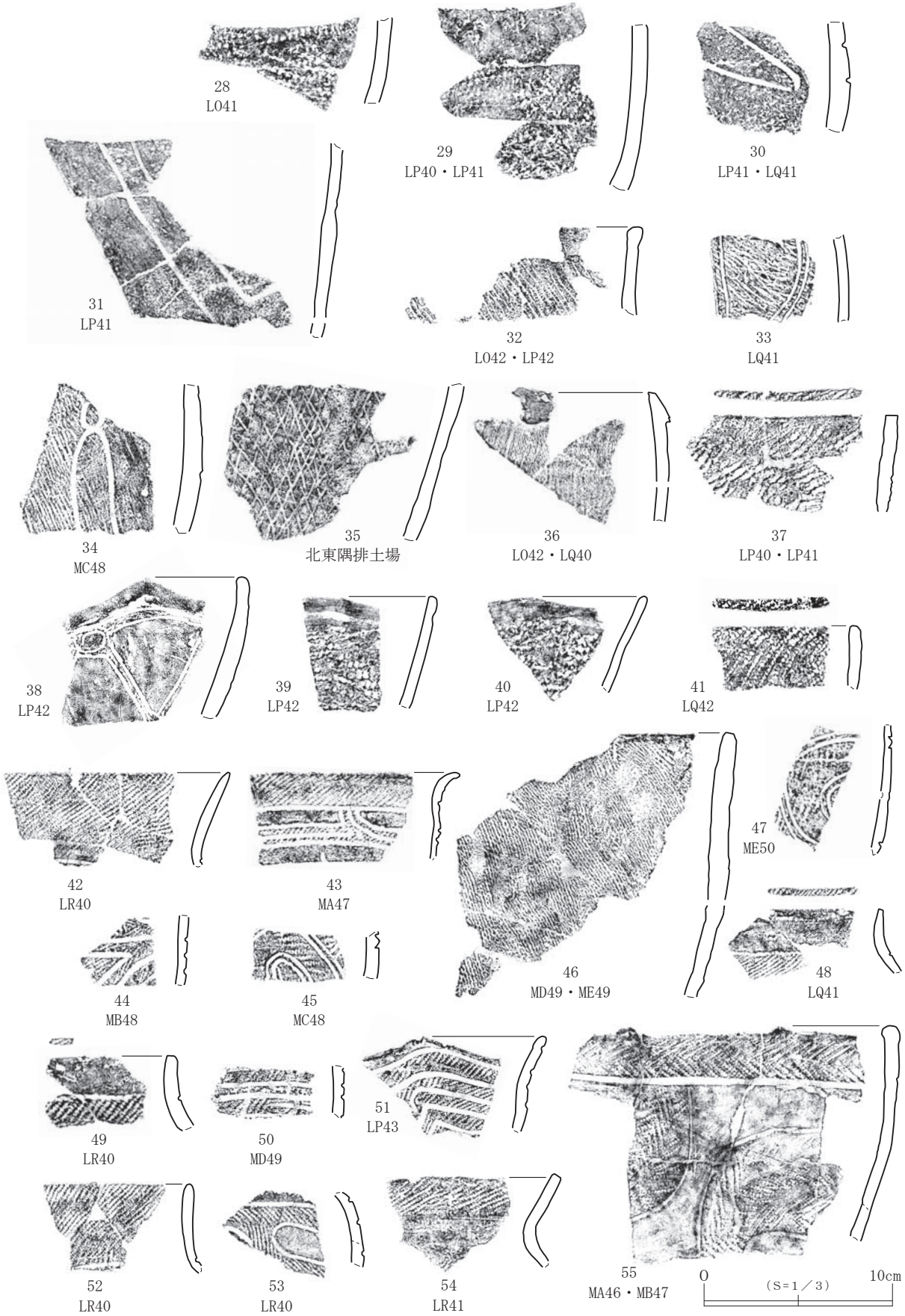
SKP08
1 暗褐色(7.5YR3/3)砂　粘性無し　しまり強
　炭化物粒φ0.1～5mm2%

焼土

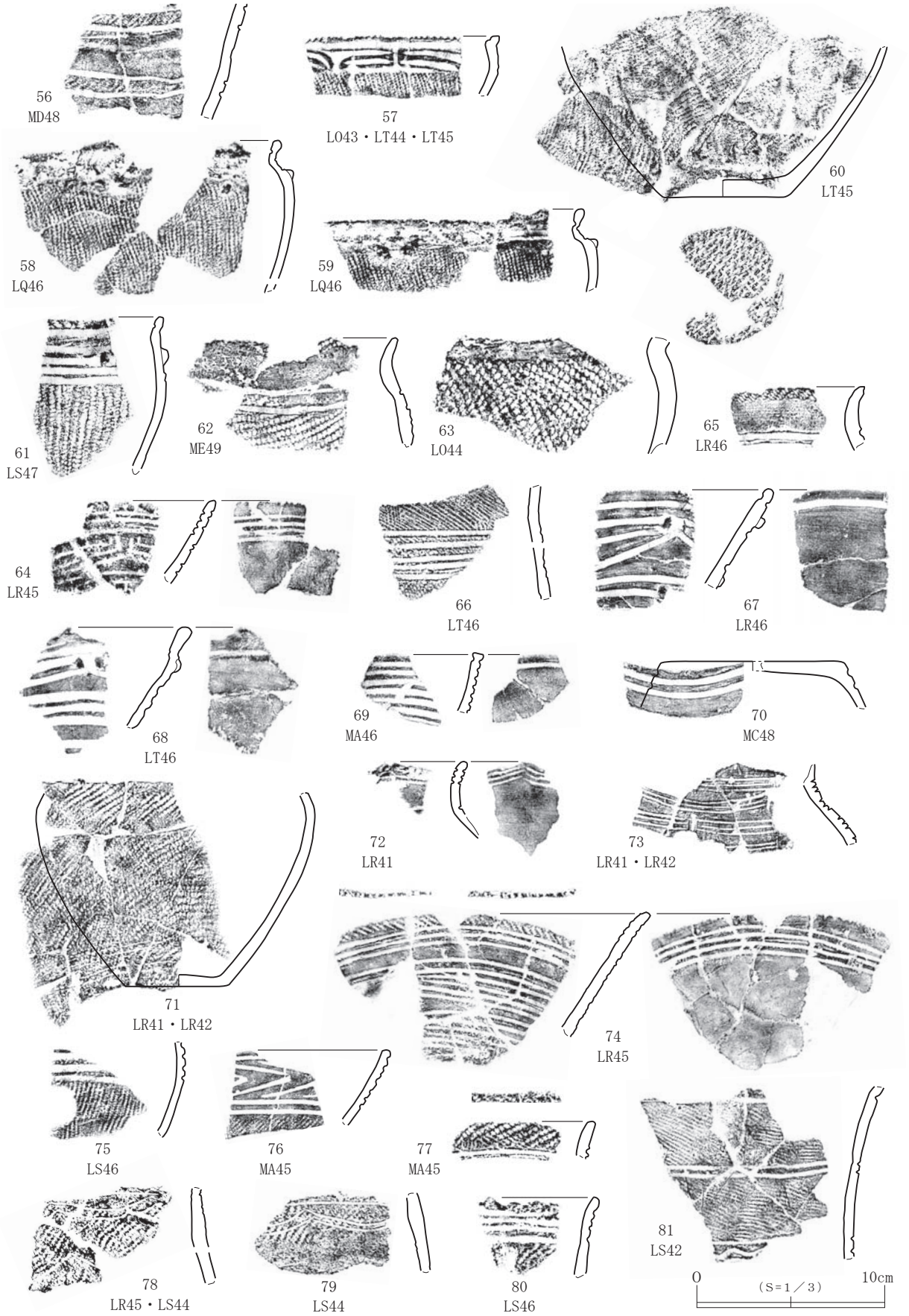
第８図　ＳＫ01・02・04・05・07、ＳＮ06、ＳＫＰ03・08


1
LO41・LO42
2
LQ41
3
LN42
4
LO43
5
LP41
6
LP46
7
LQ45
8
LR43
9
MB48
10
LR43
11
LR46
12
LS46
13
ME49
14
LR45
15
LR46
16
LO44
17
MD49
18
ME49
19
LO41
20
LO41
21
LO41・LP41
22
LP41
23
LP42
24
LN42・LP43
25
LO42・LP43
26
LO41・LO42・LP41・LP42
27
LO41・LP42
0
10cm
（S=1／3）

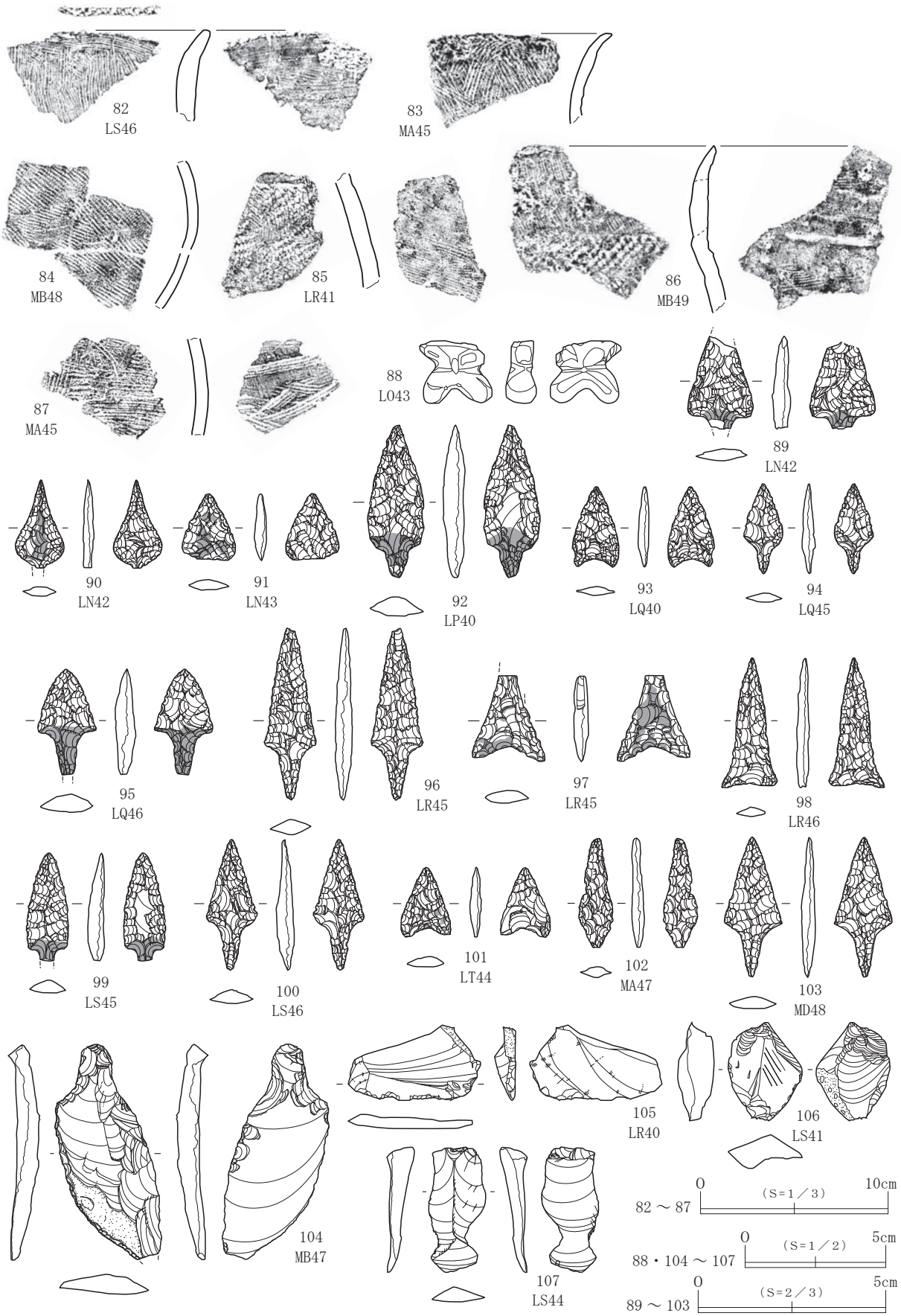
第９図　出土遺物（１）


28
LO41
29
LP40・LP41
30
LP41・LQ41
31
LP41
32
LO42・LP42
33
LQ41
34
MC48
35
北東隅排土場
36
LO42・LQ40
37
LP40・LP41
38
LP42
39
LP42
40
LP42
41
LQ42
42
LR40
43
MA47
44
MB48
45
MC48
46
MD49・ME49
47
ME50
48
LQ41
49
LR40
50
MD49
51
LP43
52
LR40
53
LR40
54
LR41
55
MA46・MB47
0
10cm
（S=1／3）

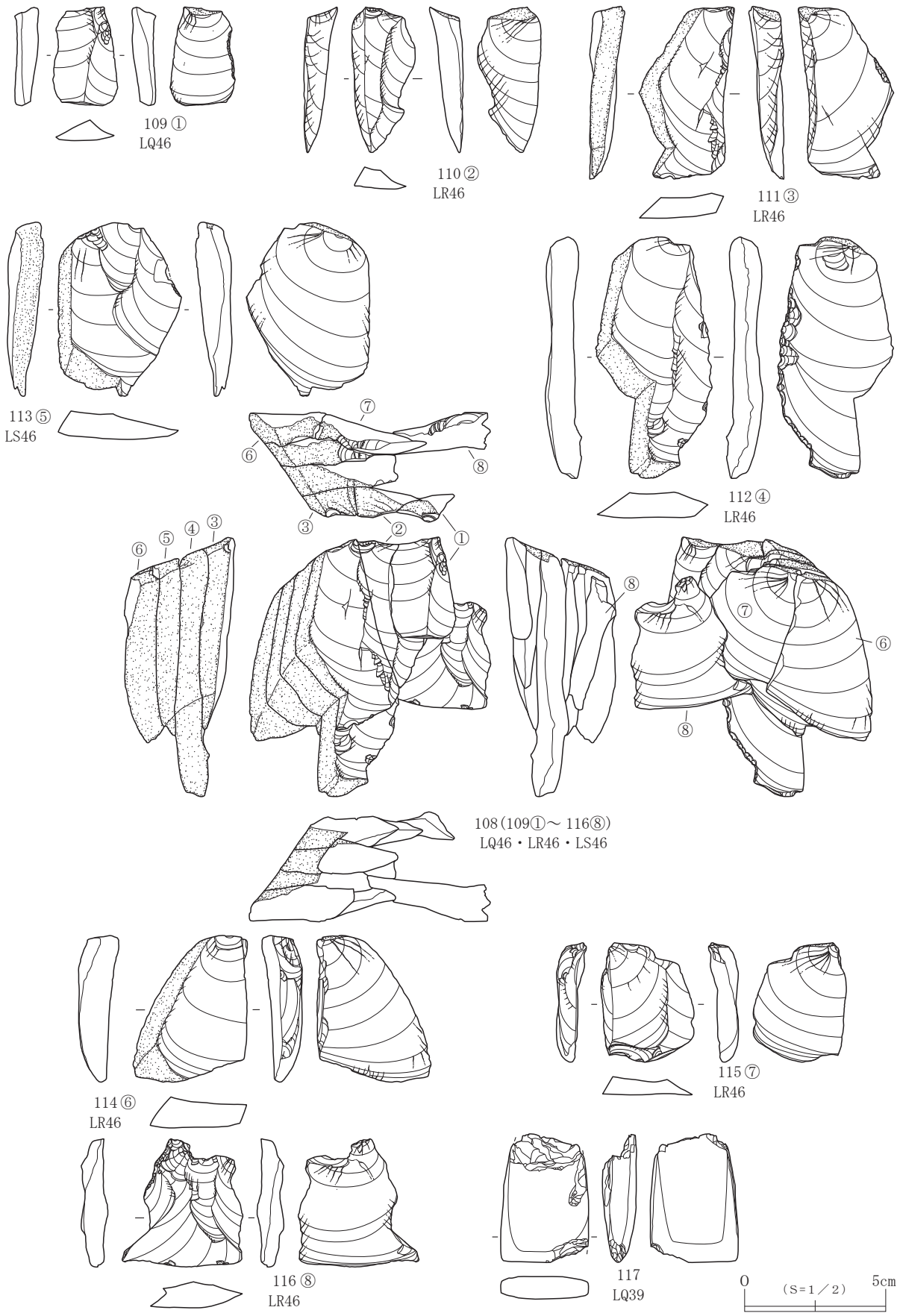
第10図　出土遺物（２）


56
MD48
57
LO43・LT44・LT45
60
LT45
58
LQ46
59
LQ46
61
LS47
62
ME49
63
LO44
65
LR46
64
LR45
66
LT46
67
LR46
68
LT46
69
MA46
70
MC48
72
LR41
73
LR41・LR42
71
LR41・LR42
74
LR45
75
LS46
76
MA45
77
MA45
81
LS42
78
LR45・LS44
79
LS44
80
LS46
0
10cm
（S＝1／3）

第 11 図　出土遺物（３）


82
LS46
83
MA45
84
MB48
85
LR41
86
MB49
87
MA45
88
LO43
89
LN42
90
LN42
91
LN43
92
LP40
93
LQ40
94
LQ45
95
LQ46
96
LR45
97
LR45
98
LR46
99
LS45
100
LS46
101
LT44
102
MA47
103
MD48
104
MB47
105
LR40
106
LS41
107
LS44
0
10cm
82 ～ 87
（S=1／3）
0
5cm
88・104 ～ 107
（S=1／2）
0
5cm
89 ～ 103
（S=2／3）

第 12 図　出土遺物（４）


109 ①
LQ46
110 ②
LR46
111 ③
LR46
113 ⑤
LS46
112 ④
LR46
108（109①～ 116⑧）
LQ46・LR46・LS46
114 ⑥
LR46
115 ⑦
LR46
116 ⑧
LR46
117
LQ39
0
（S＝1／2）
5cm

第13図　出土遺物（５）

第４表　出土遺物観察表（１）

挿図番号	遺物番号	出土区	遺物出土番号	層位	出土標高(m)	時期(型式)	器種	部位	重量(g)	外面特徴	内面特徴	備考
9	1	LO41 LO42	RP35 RP50,68,84	Ⅳ	9.415	縄文前期後葉	深鉢形土器	口縁～胴部	103.9	口縁部内湾、口唇部ミガキ(横)、胴部Ｒ単軸絡条体第１類縦回転→口縁部Ｒ単軸絡条体第１類横回転	ナデ	円筒下層式？胎土は縄文後期に類似
	2	LQ41	RP38	Ⅳ	8.555	縄文中期(大木7)	深鉢形土器	胴部	20.2	ナデ→LR＋RL結束第一種縦回転(羽状縄文、原体末端部自縄結節回転文)	ミガキ(光沢劣)	
	3	LN42	RP1	Ⅳ	9.540	縄文中期(大木8)	深鉢形土器	口縁～胴部	21.3	口縁部内湾、口縁ミガキ、RL縦回転	ナデ	
	4	LO43	RP14	Ⅳ	9.031	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	頸？～胴部	15.6	LR横回転→横位沈線	横位ナデ→ミガキ(光沢劣)	
	5	LP41	RP51	Ⅳ	9.081	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	胴部	9.2	LR縦回転→沈線	ミガキ(横)	
	6	LP46	RP4	Ⅳ	9.609	縄文中期(大木8)	深鉢形土器	口縁～胴部	13.9	口縁部キャリパー状、口唇部隆線上に横位沈線・円形刺突、RL斜回転→凸状隆線＋沈線	ミガキ(横)	
	7	LQ45	RP32	Ⅳ	8.963	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	胴部	19.5	渦巻状隆線→LR縦回転(隆線上含む)→沈線	ミガキ(横)	
	8	LR43	RP11・16	Ⅳ	8.430	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	口縁～胴部	32.0	波状口縁、口唇部肥厚、口唇直下に隆沈線、口唇部ミガキ、渦巻状隆線→（縄文原体不明）施文→沈線	ミガキ(横・斜)	9と同一個体
	9	MB48	RP40	Ⅳ下位	8.411	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	口縁～胴部	38.0	波状口縁、口唇部肥厚、口唇直下に隆沈線、口唇部ミガキ、渦巻状隆線→（縄文原体不明）施文→沈線　炭化物付着	ミガキ(横・斜)、炭化物付着、摩滅強	8と同一個体
	10	LR43	RP17	Ⅳ	8.307	縄文中期(大木8)	深鉢形土器	胴部	31.2	LR縦回転→隆線	ミガキ(横)	
	11	LR46	RP47	Ⅳ	9.328	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	口縁部	37.2	口唇部ミガキ、横位連続山形隆線貼付→L縦回転	ミガキ(横・斜)	
	12	LS46	RP34	Ⅳ	8.935	縄文中期(大木8b)	深鉢形土器	口縁部	21.5	口唇部ミガキ、渦巻状隆沈線→LR？縦回転	ミガキ(ほとんど剥落)	
	13	ME49	RP2	Ⅳ	8.557	縄文中期(大木8)	深鉢形土器	頸部～胴部	30.1	LR横回転→沈線	ナデ(横)	
	14	LR45	RP56	Ⅳ	8.857	縄文中期(大木9)	深鉢形土器	頸～胴部	19.0	RL縦回転→沈線　外面ミガキ	ミガキ(横)	15と同一個体
	15	LR46	RP43	Ⅳ	9.167	縄文中期(大木9)	深鉢形土器	口縁～胴部	18.0	隆線→RL縦回転→沈線　外面ミガキ	ミガキ(横)	14と同一個体
	16	LO44	RP13	Ⅳ	9.597	縄文中期末葉	深鉢形土器	口縁～胴部	72.0	口唇部雑な整形、LR縦回転	ナデ(器面不平滑)	
	17	MD49	RP9	Ⅳ	8.511	縄文中期末葉(大木10)	深鉢形土器	胴部	29.8	(縄文原体不明：節・条のつぶれ)施文→磨消→弧状沈線	ナデ(横)	粘土が柔らかい状態で施文
	18	ME49	RP13	Ⅳ	8.250	縄文中期末葉～後期初頭(大木10？)	深鉢形土器	胴部	22.4	LR縦回転→磨消→沈線	ミガキ？(器面剥離気味)	
	19	LO41	RP34	Ⅳ	9.350	縄文中期末葉～後期初頭	深鉢形土器	胴部	32.7	LR？(異条？)縦回転	ナデ(横)	
	20	LO41	RP40	Ⅳ	9.095	縄文中期末葉～後期初頭	深鉢形土器	口縁～胴部	62.4	Ｒ単軸絡条体第1類斜回転	ミガキ(斜・横　光沢劣)	
	21	LO41 LP41	RP47 RP43	Ⅳ	9.310	縄文中期末葉～後期初頭	深鉢形土器	口縁～胴部	73.6	口縁部内湾、横位ナデ、口唇部ミガキ、Ｒ単軸絡条体第１類斜回転	ミガキ(横・斜)	22・23と同一個体か
	22	LP41	RP28,41~44	Ⅳ	8.945	縄文中期末葉～後期初頭	深鉢形土器	胴部～底部	238.5	底部：ナデ→ミガキ	ナデ(横)	21・23と同一個体か
	23	LP42	RP18	Ⅳ	9.050	縄文中期末葉～後期初頭	深鉢形土器	胴部	31.0	Ｒ単軸絡状体第１類斜回転	ミガキ(縦)	21・22と同一個体か
	24	LN42 LP43	RP8.15 RP13	Ⅳ	9.464	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	37.0	ナデ→縦位条線状沈線	ミガキ(縦・横)、炭化物付着	25と同一個体か
	25	LO42 LP43	RP79 RP8	Ⅳ	9.311	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	15.4	ナデ→縦位条線状沈線	ミガキ(縦・横)	24と同一個体か
	26	LO41 LO42 LP41 LP42	RP2.6.21.52.59 RP40 RP37.38 RP38.39.41.59.66	Ⅳ	9.502	縄文後期初頭	深鉢形土器	口縁～胴部	254.0	波状口縁、口唇部肥厚、口唇直下に横位の雑な沈線、単軸絡条体(縄文原体不明)縦回転	ナデ(横)	27と同一個体か
	27	LO41 LP42	RP30.46.51 RP36.60	Ⅳ	9.210	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	178.0	単軸絡条体(原体不明)縦回転	ナデ(横)	26と同一個体か
10	28	LO41	RP57	Ⅳ	9.220	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	36.4	LR？斜・横回転(節つぶれ不明瞭)	ナデ、炭化物付着	29、30、31と同一個体か
	29	LP40 LP41	RP15.16 RP55.表採	Ⅳ	9.220	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部下位	92.2	LR？斜・横回転(節つぶれ不明瞭)	ミガキ	28、30、31同一個体か。他にLP40RP26,28,29、LP41RP16,17,18が接合
	30	LP41 LQ41	RP47 RP20	Ⅳ	9.069	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	40.7	沈線	ナデ	28、29、31と同一個体か
	31	LP41	RP52・62	Ⅳ	9.164	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	81.8	磨消→沈線	ナデ、摩滅強	28、29、30と同一個体か
	32	LO42 LP42	RP70 RP61	Ⅳ	9.195	縄文後期初頭	深鉢形土器	口縁～胴部	32.0	口縁部肥厚、口唇部平坦ナデ、胴部ナデ→斜位無節単軸絡条体	ナデ(斜)、ミガキ(縦)	
	33	LQ41	RP19	Ⅳ	8.636	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	25.0	Ｒ単軸絡条体斜回転→沈線	ナデ(斜)	
	34	MC48	RP18	Ⅳ	8.147	縄文後期初頭	深鉢形土器	胴部	61.0	r単軸絡条体第１類斜回転→磨消→連鎖状沈線	ミガキ	金雲母含む
	35	北東隅排土場				縄文後期初頭～前葉	深鉢形土器	胴部	75.0	網目状文(Ｒ単軸絡条体第１類斜回転)	ナデ(縦・斜)	

第５表　出土遺物観察表（２）

挿図番号	遺物番号	出土区	遺物出土番号	層位	出土標高(m)	時期(型式)	器種	部位	重量(g)	外面特徴	内面特徴	備考
10	36	LO42 LQ40	RP73,82 RP33	Ⅳ	9.535	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	29.2	波状口縁、口縁部肥厚、口縁部ミガキ、胴部：Ｒ単軸絡条体縦・斜回転	ミガキ(縦・斜)	
	37	LP40 LP41	RP8 RP10,34	Ⅳ	9.174	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	36.8	口唇上端・外面：LR？横回転	ナデ(横)	
	38	LP42	RP14	Ⅳ	8.960	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	62.0	波状口縁、口唇上端面取、無文帯に沈線文(渦巻状沈線含む)	ナデ→ミガキ(横・光沢劣)	十腰内Ⅰに比定
	39	LP42	RP58	Ⅳ	8.843	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	21.4	波状口縁、口唇～頸部ミガキ、LR斜回転、炭化物付着	ミガキ(横)	40と同一個体か
	40	LP42	RP58	Ⅳ	8.843	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	16.3	波状口縁、口唇～頸部ミガキ、LR斜回転、炭化物付着	ミガキ(横)	39と同一個体か
	41	LQ42	RP6	Ⅳ	8.525	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	19.0	口縁部僅かに内湾、LR横回転	ナデ	
	42	LR40	RP26,27,29	Ⅳ	8.205	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	32.0	口縁面取気味　LR横回転→磨消→沈線	ミガキ(横)	
	43	MA47	RP16	Ⅳ	8.407	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	35.0	LR横回転→磨消→沈線	ナデ(横)	
	44	MB48	RP8	Ⅳ	8.601	縄文後期前葉	深鉢鉢形土器	胴部	9.0	LR？横・斜回転→沈線、炭化物付着	ナデ(横)	
	45	MC48	RP13,17	Ⅳ	8.207	縄文後期前葉	深鉢鉢形土器	胴部	14.8	LR斜回転→沈線(渦巻状？)	ナデ	
	46	MD49 ME49	RP8 RP9	Ⅳ	8.233	縄文後期前葉	深鉢形土器	口縁～胴部	151.6	口唇上端面取り、Ｒ単軸絡条体第１類横・斜回転	ミガキ(横)	
	47	ME50	RP4,5,6	Ⅳ	8.451	縄文後期前葉	深鉢形土器	胴部	15.6	LR横回転→沈線(渦巻状？)	ナデ	
	48	LQ41	RP13	Ⅳ	8.689	縄文後期前～中葉	深鉢形土器	口縁～胴部	14.2	頸部LR横位側面圧痕→胴部LR横回転、口唇上端LR横回転	ミガキ(横)	
	49	LR40	RP8,9	Ⅳ	8.487	縄文後期前～中葉	深鉢形土器	口縁～胴部	21.3	胴部LR横回転→頸部LR横位側面圧痕、口唇上端ＬＲ横回転	ミガキ(横)	
	50	MD49	RP10,14	Ⅳ	8.392	縄文後期前～中葉	深鉢形土器	胴部	12.0	LR横回転→沈線	ミガキ	
	51	LP43	RP9	Ⅳ	8.997	縄文後期中葉	深鉢形土器	口縁～胴部	26.5	波状口縁、口縁頂部付近上端に棒状工具の側面圧痕による３本の刻み、LR横回転→沈線	ナデ(横)	
	52	LR40	RP30	Ⅳ	8.334	縄文後期中葉	深鉢形土器	口縁～頸部	17.7	LR横回転→沈線	ミガキ(横)	
	53	LR40	RP32	Ⅳ	8.328	縄文後期中葉	深鉢形土器	胴部	14.3	LR横・斜回転→磨消→沈線	ナデ(横)	粘土紐接合痕あり
	54	LR41	RP26	Ⅳ	8.419	縄文後期中葉	深鉢形土器	口縁～胴部	27.1	口縁部「くの字」状に外傾、LR横回転、口唇部面取	ミガキ(横)	
	55	MA46 MB47	RP1 RP15	Ⅳ	8.280	縄文後期中葉	深鉢形土器	口縁～胴部	131.0	口縁に小突起、口縁部:羽状縄文(RL縦・横)、口縁部文様帯直下に一条の横位沈線、胴部:LR縦・斜・横回転→磨消→沈線	ミガキ(横・斜)	粘土紐接合痕あり
11	56	MD48	RP4,5,6	Ⅳ	8.201	縄文後期中葉	深鉢形土器	頸～胴部	33.0	LR横回転→磨消→沈線	ナデ(横・斜)	
	57	LO43 LT44 LT45	RP28 RP RP28	Ⅲ	9.570	縄文晩期	鉢形土器	口縁～胴部	17.5	口縁部肥厚、口唇上端に刻み目列、頸部：変形工字文、胴部：RL斜回転	口縁部横位沈線１条、ミガキ(横・斜)、炭化物付着	
	58	LQ46	RP17,18,33	Ⅳ	9.331	縄文晩期	鉢形土器	口縁～胴部	53.5	胴・頸部境目に段、口唇部に刻み目列、Ｂ状突起、口唇部肥厚、頸部に横位沈線１条、肩部に２個１対の貼瘤、胴部：RL斜回転、炭化物付着	ミガキ(横)、口縁部横位沈線１条、炭化物厚く付着	59と同一個体か
	59	LQ46	RP20,21	Ⅳ	9.378	縄文晩期	鉢形土器	口縁～胴部	33.0	胴・頸部境目に段、口唇部に刻み目列、Ｂ状突起、口唇部肥厚、頸部に横位沈線１条、肩部に２個１対の貼瘤、胴部：RL斜回転、炭化物付着	ミガキ、口縁部横位沈線１条、炭化物厚く付着	58と同一個体か
	60	LT45	RP5,6,7,15,16,22	Ⅳ	8.397	縄文晩期	鉢形土器	胴部～底部	216.0	LR横回転、表面一部摩耗、底部網代圧痕	ミガキ	
	61	LS47	RP6	Ⅳ	9.179	縄文晩期後葉～弥生前期	鉢形土器	口縁～胴部	25.0	口縁部：RL横回転、横位平行沈線５条、貼瘤、胴部：RL斜回転文	ナデ、口縁部横位沈線１条	
	62	ME49	RP1,4	Ⅳ	8.618	弥生前期	甕形土器	口縁～胴部	38.8	小波状口縁、LR横回転→平行沈線	摩滅	
	63	LO44	RP2	Ⅳ	9.669	弥生前期	鉢形土器	頸～胴部	70.0	RL横回転、炭化物付着	ナデ	胎土に砂礫多く含む
	64	LR45	RP3	Ⅳ	8.940	弥生前期	高坏(台坏鉢)	口縁～胴部	15.3	口唇上端に刻み目列、胴部変形工字文	口縁部横位沈線４条、ミガキ(横)	
	65	LR46	RP14	Ⅳ	9.067	弥生前期	甕形土器	口縁～胴部	16.0	口縁部ハケメ→ナデ→口唇部LR横回転、頸部横位沈線１条(２条か)、炭化物付着	ミガキ(横)	
	66	LT46	RP7	Ⅳ	8.677	弥生前期	甕形土器	頸～胴部	24.7	ハケメ→(縄文原体不明)回転圧痕→横位沈線５条、	ナデ	
	67	LR46	RP27	Ⅳ	9.359	弥生前期	浅鉢形土器	口縁～胴部	27.8	口縁～胴部：変形工字文交点に２個１対の粘土粒	ミガキ(横)、口縁部横位沈線１条、炭化物付着	
	68	LT46	RP8,17	Ⅳ	8.286	弥生前期	浅鉢形土器	口縁～体部	18.1	瘤状山形小突起、変形工字文交点に２個１対の粘土粒貼付	口縁部浅い横位沈線１条→ミガキ(横)	
	69	MA46	RP2	Ⅳ	8.392	弥生前期	浅鉢形土器	口縁～胴部	7.0	変形工字文	横位沈線１条→ミガキ(横)	
	70	MC48	RP15	Ⅳ	8.147	弥生前期	蓋形土器		35.0	盤形、上・側面ミガキ、側面上位横位沈線２条	ミガキ	
	71	LR41 LR42	RP4,5,6 RP4,8,9	Ⅳ	8.453	弥生中期	鉢形土器	頸部～底部	150.0	ハケメ→LR横回転、一部朱付着、底部ミガキ	ミガキ(横)	
	72	LR41	RP8	Ⅳ	8.327	弥生中期	鉢形土器	口縁～肩部	8.8	口縁に沿う平行沈線３条、頸部横位沈線１条、朱付着	口縁に沿う平行沈線３条、沈線内朱付着、ミガキ(横)	73と同一個体か
	73	LR41 LR42	RP9 RP16	Ⅳ	8.356	弥生中期	鉢形土器	口縁～胴部	19.3	変形工字文交点縦刻線、ミガキ(横)	ミガキ(横)	72と同一個体か

第６表　出土遺物観察表（３）

挿図番号	遺物番号	出土区	遺物出土番号	層位	出土標高(m)	時期(型式)	器種	部位	重量(g)	外面特徴	内面特徴	備考
11	74	LR45	RP5,9,10,32,47	Ⅳ	9.082	弥生中期	高坏(台坏鉢)	口縁～胴部	34.0	口唇部刻み目列、口縁部：RL横回転→磨消(ミガキ)→横位沈線３条、胴部：変形工字文	口縁部横位沈線４条、ミガキ(横)	
	75	LS46	RP27	Ⅳ	8.974	弥生中期	鉢形土器	頸～胴部	11.2	RL横回転→横位平行沈線	ミガキ	
	76	MA45	RP3	Ⅳ	8.324	弥生中期	高坏(台付鉢)	口縁～胴部	13.1	LR横回転→磨消→沈線	ミガキ	
	77	MA45	RP5	Ⅳ	8.275	弥生中期	甕形土器	口縁～頸部	9.9	ハケメ→LR横回転→沈線	摩滅強	
	78	LR45 LS44	RP57 RP30	Ⅳ	8.660	弥生中期	甕形土器	頸～胴部	29.7	LR横回転→磨消→沈線(弧状)、炭化物付着	ナデ	79と同一個体か
	79	LS44	RP24	Ⅳ	8.486	弥生中期	鉢形土器	頸～胴部	27.0	LR横回転→磨消→沈線(直線・弧状)	ほとんど剥落	78と同一個体か
	80	LS46	RP18	Ⅳ	8.984	弥生中期	鉢形土器	口縁～胴部	13.9	口唇部刻み目、小波状口縁、頸部横位沈線４条、胴部RL縦回転？摩滅強	ナデ(横)	
	81	LS42	RP5	Ⅳ	8.110	弥生中期	鉢形土器	口縁～胴部	48.6	RL横回転→沈線(平行・山形)	ハケメ→ナデ	
12	82	LS46	RP10	Ⅳ	8.932	弥生中期	甕形土器	口縁～胴部	36.6	口唇上端LR横回転、口縁部：横位ハケメ、胴部：縦・斜位ハケメ	ハケメ(ナデ)	
	83	MA45	RP一括	Ⅳ	8.020	弥生中期	甕形土器	口縁部	27.6	ハケメ	ハケメ(横・斜)→ナデ	
	84	MB48	RP2,3,16	Ⅳ	8.706	弥生中期	甕形土器	胴部	35.0	ハケメ→RL斜回転	ナデ(斜)	
	85	LR41	RP18	Ⅳ	8.290	弥生中期	甕形土器	頸～胴部	43.0	ハケメ→LR横回転、炭化物付着	ハケメ(ナデ)、炭化物付着	
	86	MB49				弥生中期	甕形土器	口縁～胴部	60.3	ハケメ(縦・斜)→LR横？	ハケメ→ナデ、粘土紐接合痕あり	確認調査出土遺物
	87	MA45	RP一括	Ⅳ	8.020	弥生中期	鉢形土器	胴部	24.7	ハケメ	ハケメ(横・斜)、朱付着	
	88	LO43		Ⅳ	9.499	晩期	土偶		5.2	X字形土偶、頭部・左手部欠損、摩滅強、		
	89	LN42	RQ1	Ⅳ	9.467		石鏃		1.8	頁岩、平基有茎鏃、先端部茎部折損、両面全面二次加工、茎部アスファルト付着		
	90	LN42	RQ2	Ⅳ	9.550		石鏃		0.7	木の葉形の凸基有茎鏃、茎部折損、両面全面二次加工、体部中央アスファルト付着		
	91	LN43	RQ1	Ⅳ	9.517		石鏃		0.7	頁岩、平基鏃、両面全面二次加工、体部アスファルト付着		
	92	LP40	RQ1	Ⅳ	8.866		石鏃		3.0	頁岩、凸基有茎鏃、右面中央素材面残、茎部アスファルト付着		
	93	LQ40	RQ1	Ⅳ	8.896		石鏃		0.7	頁岩、凹基鏃、両面全面二次加工		
	94	LQ45	RQ1	Ⅳ	9.258		石鏃		0.5	凸基有茎鏃、両面全面二次加工		
	95	LQ46	RQ2	Ⅳ	9.481		石鏃		1.6	頁岩、平基有茎鏃、両面全面二次加工、茎部アスファルト付着		
	96	LR45	RQ1	Ⅳ	9.079		石鏃		2.1	凸基有茎鏃、先端部折損、両面全面二次加工		
	97	LR45	RQ8	Ⅳ	8.769		石鏃		0.4	凹基鏃、先端部折損、両面全面二次加工、体部アスファルト付着		
	98	LR46	RQ1	Ⅳ	9.297		石鏃		1.1	頁岩、凹基鏃、両面全面二次加工		
	99	LS45	RQ1	Ⅳ	8.544		石鏃		1.3	頁岩、平基有茎鏃、右面中央素材面残、茎部アスファルト付着		
	100	LS46	RQ3	Ⅳ	9.064		石鏃		1.2	頁岩、凸基有茎鏃、両面全面二次加工		
	101	LT44	RQ1	Ⅳ	8.265		石鏃		0.6	頁岩、凹基鏃、両面全面二次加工、アスファルト付着		
	102	MA47	RQ2	Ⅳ	8.461		石鏃		0.4	尖基鏃、両面全面二次加工、側面湾曲		
	103	MD48	RQ1	Ⅲ	8.234		石鏃		1.3	凸基有茎鏃、両面全面二次加工		
	104	MB47	RQ1	Ⅳ	8.260		石匙		17.0	縦長剥片素材、自然面残、左面左縁辺に細かい二次加工、右面左縁中央に二次加工、素材打面両側面二次加工施し、つまみ部作出		
	105	LR40	RQ3	Ⅳ	8.820		二次加工ある剥片		6.2	頁岩、横長剥片素材、自然面残、左面下縁辺一部細かい二次加工		
	106	LS41	RQ1	Ⅳ	8.269		二次加工ある剥片		7.8	黒曜石、自然面残、左面右縁辺一部細かい二次加工		
	107	LS44	RQ1	Ⅳ	8.509		二次加工ある剥片		4.6	頁岩、縦長剥片素材、左面左縁辺、右面右縁辺の一部に細かい二次加工		
13	108									109～116が接合		
	109	LQ46	RQ1	Ⅳ	9.386		二次加工ある剥片		5.2	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残、右面右縁辺一部細かい二次加工		
	110	LR46	RQ7	Ⅳ	9.127		剥片		7.9	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残		
	111	LR46	RQ4	Ⅳ	9.155		二次加工ある剥片		17.2	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残、左側面右面右縁辺一部細かい二次加工		
	112	LR46	RQ3	Ⅳ	9.193		スクレイパー		32.5	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残、自然面右面左縁辺細かい二次加工		
	113	LS46	RQ4	Ⅳ	8.819		剥片		27.9	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残、左側面～末端自然面		
	114	LR46	RQ8	Ⅳ	9.045		剥片		21.8	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残、左側面～末端自然面		
	115	LR46	RQ12	Ⅳ	9.192		剥片		11.0	頁岩、縦長剥片素材、自然面打面残		
	116	LR46	RQ11	Ⅳ	9.454		二次加工ある剥片		13.1	頁岩、縦長剥片素材、剥離面打面か、左面左縁辺一部細かい二次加工		
	117	LQ39	RQ1	Ⅳ	8.843		磨製石斧		26.6	基端部欠損、刃部一部刃こぼれ		

第４章　総括

本遺跡の発掘調査によって、土坑５基、焼土遺構１基、柱穴様ピット２基の遺構が検出された。いずれの遺構も、大きくは縄文時代前期から弥生時代中期までの遺構であると考えられるが、詳細な時期や性格は不明である。

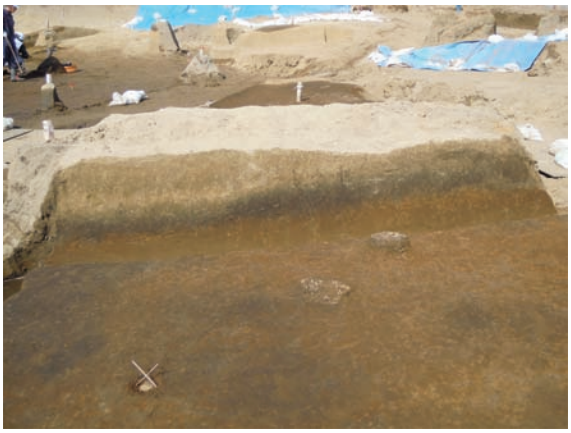
遺物のうち、石器は、様々な形態の石鏃や剥片がまとまって出土した。接合した剥片石器８点のうち、４点には二次加工痕がある。周辺からは、この資料と接合はしなかったが、同一母岩から剥離されたと考えられる剥片も出土した。また、出土した剥片石器のうち、52点(54.2％)がＬＱ～ＬＴ45・46区に集中し、接合資料の他に、４種類の異なる母岩から剥離されたと考えられる二次加工ある剥片や剥片群が出土している。さらに、当該区からは製品が７点、剥片のうち、刃部調整によって生じた可能性がある１ｇ未満の微細な剥片11点が出土している。調査区からは、接合資料の残核も含めて、石核が出土していない。残核を調査区外や遺跡外に持ち出している可能性も考えられるが、調査区以外の遺跡内、または遺跡外から剥片を搬入し、当該区では二次的な加工を主とした石器製作が行われていたものと推測する。

遺跡は、大正元年測図の地形図(第４図)から推測すると、砂丘地帯の東端付近にある標高11.6mの小丘とその周辺に立地していたものと考えられる。遺跡からは、縄文時代前期後葉から弥生時代中期までの遺物が、第Ⅲ層と第Ⅳ層から混在した状況で出土した。但し、出土遺物は縄文時代前期後葉～後期中葉と縄文時代晩期後葉～弥生時代中期までの二時期に大別できる。以上のことから、①当該期には遺跡周辺の砂丘上では新たな堆積による地形の大きな変動はなかったものと考えられ、砂丘地が形成されたのは縄文時代前期後葉以前と考えられる。②遺跡周辺では縄文時代後期中葉まで少なくとも断続的に活動が継続していたと考えられる。その後、活動は断絶したものと考えられるが、縄文時代晩期後葉から再び始まり、弥生時代中期まで確認できる。

本遺跡と同様の立地条件を持ち、並行する弥生時代の遺物を発掘または採集された秋田砂丘地帯の東端の遺跡としては、第２章第１節で既述した平右衛門田尻遺跡や小泉潟周辺の小丘上に展開した遺跡群などがある。本遺跡も含めて、砂丘地上を活動の場とした痕跡を壺形土器や深鉢形土器などの出土遺物から知ることができるが、当時の集落の様相を示す遺構や遺物の検出には至っていない。本遺跡では、遺物が低湿地の周辺でも出土することから、低湿地も生活の場として活用されていたものと考える。初期の稲作は、沼沢地を利用した湿田で行われていると考えられている[註1]ことから、本遺跡周辺が縄文時代晩期後葉に再度活動の場として活用される背景には、低湿地を利用する稲作農耕の伝播があげられないだろうか。八郎潟の西側縁辺部の砂丘上に立地し、竪穴建物跡から炭化米が出土し、稲作農耕の一端が明らかになった横長根Ａ遺跡[註2]のように、今後、砂丘地上にある遺跡の調査によって、縄文時代晩期後葉から弥生時代にかけての集落の様相や初期の稲作農耕についての類例が増え、本遺跡の砂丘地の小丘とその周辺にある低湿地での生活の様相が解明できる可能性があると考える。

註１　八賀晋　「古代の水田とその土壌環境」『地理』Vol.28№10　1983(昭和58)年　古今書院
註２　若美町教育委員会　『横長根Ａ遺跡－秋田県南秋田郡若美町横長根Ａ遺跡の調査報告－』　1984(昭和59)年

1　調査区全景（北西→）



2　基本層序Ｃ東側断面（南東→）

3　基本層序Ｄ東側断面（東→）

4　ＳＫ01検出状況（南西→）

5　ＳＫ02半截状況（南→）

図版2

1　ＳＫ07完掘状況（南西→）

2　ＳＮ06検出状況（南西→）

3　ＳＫＰ03半截状況（南西→）

4　ＳＫＰ08半截状況（南東→）

5　接合した剥片石器の出土状況（西→）

6　第Ⅲ・Ⅳ層遺物出土状況（西→）

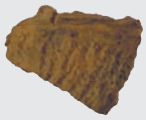
7　作業風景（南→）

8　地元老人会の見学会（北西→）

1
LO41・LO42

2
LQ41

3
LN42


4
LO43

5
LP41

6
LP46

7
LQ45

8
LR43

9
MB48

10
LR43

11
LR46

12
LS46

13
ME49

14
LR45

15
LR46

16
LO44

17
MD49

18
ME49

19
LO41

20
LO41

21
LO41・LP41

22
LP41

24
LN42・LP43

25
LO42・LP43

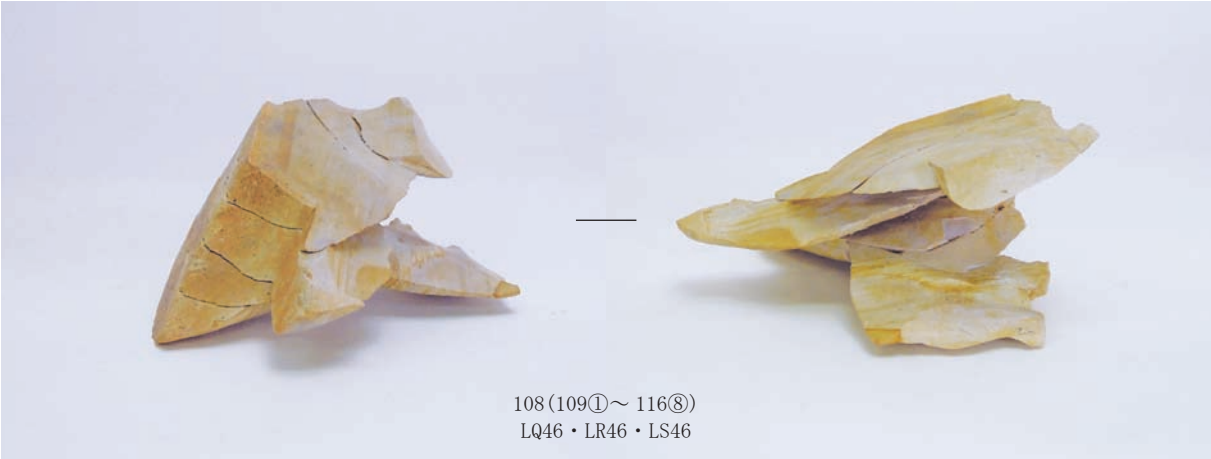
出土遺物（１）

26
LO41・LO42・LP41・LP42
30
LP41・LQ41
31
LP41
32
LO42・LP42
33
LQ41
27
LO41・LP42
34
MC48
35
北東隅排土場
36
LO42・LQ40
38
LP42
39
LP42
40
LP42
46
MD49・ME49
42
LR40
43
MA47
44
MB48
45
MC48
47
ME50
50
MD49
51
LP43
53
LR40
54
LR41
56
MD48
55
MA46・MB47

出土遺物（２）

60
LT45
58
LQ46
57
LO43・LT44・LT45
59
LQ46
61
LS47
62
ME49
64
LR45
65
LR46
66
LT46
67
LR46
68
LT46
69
MA46
70
MC48
72
LR41
73
LR41・42
74
LR45
75
LS46
76
MA45
77
MA45
79
LS44
80
LS46
81
LS42
88
LO43
71
LR41・LR42

出土遺物（３）



108(109①～116⑧)
LQ46・LR46・LS46

出土遺物(4)

報　告　書　抄　録

ふりがな	けんりつろうがっこういせき
書名	県立聾学校遺跡
副書名	旧県立聾学校解体工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第484集
編著者名	簗瀬圭二　村上義直
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　ＴＥＬ0187－69－3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010－8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号　ＴＥＬ018－860－5193
発行年月日	西暦2013年２月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
県立聾学校遺跡（けんりつろうがっこういせき）	秋田県秋田市土崎港北２丁目17外（あきたけんあきたしつちざきみなときたちょうめ）	05201	201-1-351	39° 45′ 44″	140° 4′ 53″	20110928 ～ 20111130	1,165㎡	旧県立聾学校解体工事に係る埋蔵文化財事前発掘調査

所収遺跡名	種別	時代と時期	遺構と数	主な遺物	特記事項
県立聾学校遺跡	集落跡	縄文時代 ～弥生時代	土坑　５基 焼土遺構　１基 柱穴様ピット　２基	縄文土器（前期～晩期） 弥生土器（前期～中期） 剥片石器 礫石器	砂丘地に立地する遺跡である。

要約	調査区はほぼ南北に延びる砂丘地に立地する。発掘調査で検出された遺構や遺物から、この遺跡では、縄文時代前期後葉～後期後葉まで少なくとも断続的に活動が継続した。その後、活動は断絶したものと考えられるが、縄文時代晩期後葉から再び始まり、弥生時代中期まで確認できる。広義の剥片石器が比較的集中して出土した。その中の８点が接合したことや刃部調整によって生じた可能性がある微細な剥片も出土していることから、集落内では石器製作が行われていたものと考える。

秋田県文化財調査報告書第484集
県 立 聾 学 校 遺 跡
－旧県立聾学校解体工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成25年２月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話0187-69-3331　ＦＡＸ0187-69-3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話018-860-5193

印　　刷　株式会社　三森印刷